

SEIREI CHRISTOPHER UNIVERSITY
Community-Based Practice and Research Center for Health and Welfare

聖隷クリストファー大学

保健福祉実践開発研究センター 年報

地域貢献事業研究 報告書

第5号
2013



聖隷クリストファー大学
保健福祉実践開発研究センター

ごあいさつ

聖隷クリストファー大学保健福祉実践開発研究センター年報第5号(2013)の刊行にあたり、ご挨拶させていただきます。

当センターの活動は、2014年度の現在6年目に入っており、当年報では2013年度の実績を報告しております。

地域の実践現場とともに共同で行う「研究」に重点を置き、その研究成果を地域へ還元することを目的にした2013年度の地域貢献事業研究費の採択数は6件でした。募集時に対象となる事業研究の考え方や配分総額および審査基準を従来よりも明確にしたことでレベルの高い内容の事業研究と適切な配分ができたと考えております。この6件の事業研究の報告書は当年報に掲載しております。また、研究成果の報告会は例年11月に行われます聖灯祭・ホームカミングデー同日にポスター形式で行っており、地域の皆様や卒業生にご覧いただいています。さらに今年は新しい試みとして、採択された研究代表者によるプレゼンテーションも行います。

公開講座につきましては、時勢やニーズに合ったテーマ設定をし、2013年度は専門職向けの公開セミナーを2回、一般の方向けの公開講座を2回実施しました。公開講座ではテーマに沿って高名な講師をお招きしご講演をお願いしております。受講者数は年々増加しており、受講者の満足度も高い結果が得られました。今後も引き続き、専門職向け、一般の方向けともに皆様のニーズに応えられる講座を開催していきます。

地域の専門団体や施設、行政から当センターへの講師や委員の派遣依頼は年々増加しており、地域で果たす本学の役割を拡大することにつながり、大変喜ばしいことと感じています。2013年度は学内教員にアンケートを実施し、講師として派遣依頼に応じることのできる専門分野を調査いたしましたので、さらに広くご依頼に応じることができるものと思っております。これからも保健福祉実践開発研究センターが地域の皆様から必要とされ、“地域と歩む”実践を続けてまいる所存です。皆様のご支援ご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

2014年11月

聖隷クリストファー大学
保健福祉実践開発研究センター
センター長 小島 千枝子

目 次

I. 2013 年度事業報告

1. 地域貢献事業研究 課題一覧	1
2. 公開セミナー・公開講座	3
3. 研修会講師等派遣	9
4. 保健医療福祉団体の委員等派遣状況	15
5. 研究支援実施状況	17
6. 資 料	18

II. 2013 年度地域貢献事業研究 報告書

保健福祉実践開発研究センター運営会議 委員一覧	54
-------------------------	----

1. 地域貢献事業研究 課題一覧

当センターでは、本学周辺地域の保健医療福祉分野に貢献する事業研究を対象として『地域貢献事業研究費』を配分しています。2013年度は計9件(区分A:6件、区分B:3件)、計2,993,615円の申請があり、保健福祉実践開発研究センターによる審査を経て、大学部長会での審議の結果、6件の課題を採択し、計1,281,099円の事業研究費を配分しました。研究課題6件の報告書を当年報(P.31～)に掲載しておりますので、併せてご覧ください。

(区分)

A: 本学周辺地域の保健医療福祉の向上を目的とし、地域の保健医療福祉の実践現場と共同で行う研究

B: 本学周辺地域の保健医療福祉の向上を目的とし、地域との基盤作りとしての事業に関する共同研究

所属*	研究代表者	職位	区分	研究課題	対象地域	配分額(円)
看護	伊藤純子	助教	A	保健専門職が対応するクレーム特化型研修プログラムの共同開発	浜松市を中心として静岡県全域	195,125
介護	野田由佳里	准教授	A	介護福祉士資格取得後に職場定着に影響を及ぼす促進要因に関する研究	静岡県全域	162,060
リハPT	西田裕介	教授	A	高齢者における身体機能と運動時の疲労に対する適応能力に関する研究	浜松市北区	308,800
リハPT	金原一宏	助教	B	地域在住高齢者を支えるリハビリサポート体制の構築	浜松市北区・中区	257,516
リハOT	伊藤信寿	准教授	B	発達障害をもつ児童への支援の確立、および少～青年期の支援研究	浜松市	86,220
リハST	池田泰子	准教授	B	地域における言語聴覚士の専門性の活かし方を検証～ことばの教室の先生を対象とした機能性構音障害のスキルアップ研修を開講～	静岡県西部地域(浜松市・磐田市・袋井市)	271,378
合計						1,281,099

*看護＝看護学部、介護＝社会福祉学部介護福祉学科、リハ＝リハビリテーション学部、PT＝理学療法学科、OT＝作業療法学科、ST＝言語聴覚学科

<地域貢献事業研究 報告会>

2012年度に地域貢献事業研究費の配分を受け実施された事業研究の報告会を下記日程で開催しました。

日時：2013年11月2日(土) 10時00分～15時00分 ※聖灯祭・ホームカミングデーと同日開催

場所：聖隷クリストファー大学1号館4階 1409中教室

発表：ポスター発表および口頭発表 来場者数：119名

地域貢献事業研究費 2013 年度募集要項

保健福祉実践開発研究センター「地域貢献事業研究費」について、下記の要領で研究計画を募集します。

1. 基本方針

保健福祉実践開発研究センターの柱のひとつである「保健医療福祉分野に係るすべての人たちとの共同研究・事業」を推進し、共同で課題解決を図るために、本学周辺地域の保健医療福祉分野に貢献する研究を対象とした事業研究費を募集します。

2. 対象となる研究および事業研究費の金額

本学周辺地域の保健医療福祉の向上を目的とし、

A：地域の保健医療福祉の実践現場と共同で行う研究

B：地域との基盤作りとしての事業に関する共同研究

- ・実習先・就職先施設等と連携した研究であればなお望ましい。
- ・研究費の配分総額は130万円、1件当たり最大40万円です(共同研究費とは上限額が異なります)。なお、地域貢献事業研究費の総額は、並行して募集する共同研究費の申請状況も考慮し、大学全体の研究費予算の枠内で柔軟に対応していきます。(配分総額は、2013年度予算決定をもって確定しますので、変わる可能性があります)
- ・配分対象の経費および単価基準は、「共同研究費取り扱い要領」の「7. 申請できる経費」に準じますのでご確認ください。要領と異なる取り扱いを希望する場合は、その理由と算出根拠を記載してください。
- ・限られた予算を有効に配分するため、既に研究室に備えられているパソコン、プリンター、総務部で貸出をしているデジカメ、ビデオカメラ、ICレコーダー等の申請はできるだけご遠慮ください。特別な事情により申請をする場合は、計画書に申請理由を添付してください。

3. 対象期間

2013年4月1日～2014年3月31日

4. 研究成果の提出

- ・研究代表者は、研究期間内における研究課題の成果を取りまとめ、研究成果報告書を2014年6月末日までに保健福祉実践開発研究センターに提出してください。
- ・研究代表者は、保健福祉実践開発研究センターが企画する報告会等で発表する義務を負います。

5. 審査の方法

保健福祉実践開発研究センターは、配分案を検討するにあたり、申請された計画書に対して以下の項目を目安にして審査をします(A・Bそれぞれ15点満点。絶対評価)。

項目	A	B
(1-A) 本学周辺地域の保健医療福祉の向上にどのように貢献できるか <5点満点>	○	—
(1-B) 本件が地域との基盤作り等である場合の将来展望 <5点満点>	—	○
(2) 研究計画・方法の妥当性 <5点満点>	○	○
(3) 申請経費の妥当性 <5点満点>	○	○

2. 公開セミナー・公開講座

当センターでは、専門職向けの講座を「公開セミナー」、一般の方向けの講座を「公開講座」として毎年度開催しています。公開セミナーは本学教育の特徴である「IPW（専門職連携）」と「リーダーシップ」をテーマとし、公開講座は時勢やニーズに合わせたテーマを年度ごとに設定しています。2013年度公開講座は「発達障がい」と「健康長寿」をテーマに実施しました。

1) 公開セミナー① リーダーシップに関する公開セミナー

(1) 概要

タイトル：「介護事業とリーダーシップ ～何のために、何を目指して～」

日時：2013年7月20日（土）13時30分～15時30分

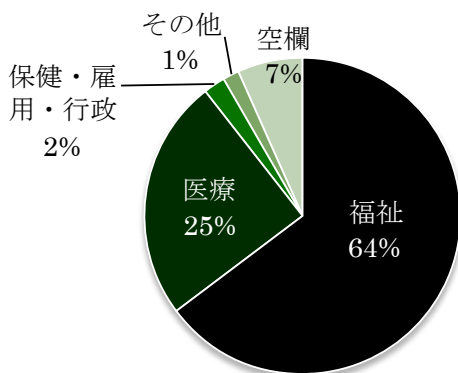
講師：高橋 義孝 氏（株式会社ケアクオリティ 代表取締役社長）

対象：保健医療福祉の専門職者他

参加者：定員 200名 参加 135名 申込 155名

アンケート回収：115件

(2) 参加者職業内訳（合計 135名）



福祉の専門職・・・介護福祉士 16名、施設管理者 6名、介護支援専門員 3名、

相談員 2名他

医療の専門職・・・看護師 6名、理学療法士 5名、作業療法士 2名、臨床工学技士 2名他

行政、雇用、保健の専門職・・・大学所属 1名、訪問看護師 1名、保健事業主 1名他

(3) アンケート結果

設問 1. 参加しようと思った理由、目的は何ですか？

「リーダーとなって日が浅く、今後、どのように現場を運営していくべきか悩んでいたから」、「リーダーとして働く上でどのように意識を持てばよいか学びたかったから」など、職場で新たにリーダー的な立場となったが、どの様に取り組んでいったら良いのかヒントを得たくて参加した方、また「リーダーシップについて学び、仕事場で少しでも実践できたらと思ったから」、「今後、自分がどのように仕事に取り組めばよいか参考にしたかった」など、職場で役立てたいという方々の声が全体の半数を占めました。

設問 2・3 目的は達成できましたか？ その理由

50%の方が「大いに達成できた」「ほぼ達成できた」と回答しました。「リーダーに必要なことを知ることができた。明日から活かしていきたい」、「リーダーとしての立ち位置が分かった」、「自分の方向性を見直すことができた」など、職場で実践的に役立つヒントを得たとの回答が見られたほか、「リーダーシップ論を具体的に聞いたことは良かったが、自分がどう生かしていけるのかが不透明である」、「もっと事例を多く聞きたかった」などの声もいただきました。

設問 4 今回の講座の感想

「実際に事業を手掛けている講師の話は理解しやすかった」、「体験談などを交えて聞きやすかった」、「価値観・信念が明確に伝わってきた」など、先生の講義内容が素晴らしかったこと、また「考えの視野が広がった」、「今後、仕事の中で活かしていけるものを学ぶことが出来て大変良かった」、「自分の出来るリーダーシップの方向性のヒントをいただけた」など、多くのことを学び取っていただけた様子が伺えました。最後に行われた講師の先生によるサクソ演奏についても「大変すばらしかった」「演奏を聴いて心が洗われた」など、楽しんでいただけた様子が伺えました。

2) 公開セミナー② IPW（専門職連携）に関する公開セミナー

(1) 概要

タイトル：「多職種連携により認知症・地域包括ケアの困難事例に立ち向かう」

日時：2013年12月14日（土）13時30分～16時30分

講師：遠藤 英俊 氏（国立長寿医療研究センター 内科総合診療部長）

シボジスト：下山 久之 氏（同朋大学社会福祉学部 准教授）【社会福祉士】

小島 千枝子（本学リハビリテーション学部言語聴覚学科 教授）【言語聴覚士】

矢倉 千昭（本学リハビリテーション学部理学療法学科 准教授）【理学療法士】

野田 由佳里（本学社会福祉学部介護福祉学科 准教授）【介護福祉士】

山本 要子（本学看護学部 准教員）【看護師】

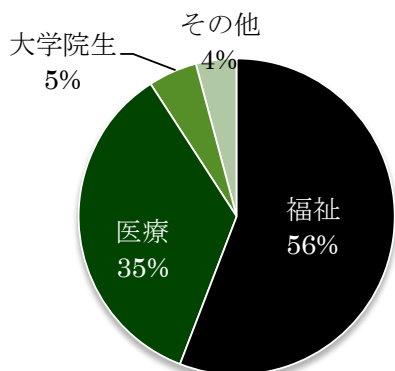
コーディネーター：梅本 充子（本学看護学部 准教授）

対象：保健、医療、福祉、心理、保育、教育、リハビリテーション、雇用、行政などの専門職者

定員：200名 参加：101名 申込：123名

アンケート回収：83件

(2) 参加者職業内訳（合計 101名）



福祉の専門職・・・介護支援専門員・介護福祉士 16名、ケアマネージャー3名、社会福祉士2名、相談員2名他

医療の専門職・・・看護師 14名、理学療法士1名、作業療法士4名、言語聴覚士1名、医療ソーシャルワーカー1名、歯科衛生士1名他



第1部：基調講演



第2部：シンポジウム

(3) アンケート結果

設問1 参加しようと思った理由、目的は何ですか？

「多職種連携について、どのような問題があるのか、また、どのように乗り越えていけばよいのかを学びたかった」、「多職種連携の具体的な方法を学びたかった」など、4割近い方が“多職種連携”に強い関心を持って参加されたことが分かりました。また、「訪問介護サービス事業者として、困難事例に対処する方法、経験談などを参考にしたかった」、「今後も増えると思われる認知症のケアについて学習するため」など、事例から具体的な方法を学んで職場に活かしたいと考えて参加された方が多いことも伺えました。

設問2・3 目的は達成できましたか？ その理由

51%の方が「大いに達成できた」「ほぼ達成できた」と回答されました。「シンポジウムで各職種の立場から、現実的かつ論理的な意見を聞くことができた」、「多職種連携を進めていくために必要なことが具体的に分かったことで、今、自分に足りていない点に気付くことができた」、「シンポジウムを通して、専門職のそれぞれの立場から利用者（患者）へのアプローチが違うので、それぞれの専門職の理解に努めながら話し合う姿勢が参考になった」という声が挙がりました。

設問4 今回の講座の感想

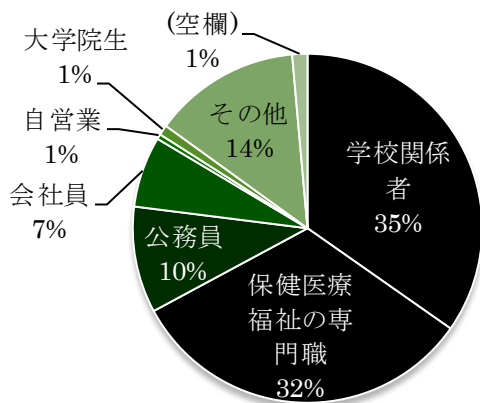
アンケートの感想では、「遠藤先生のお話がとてもおもしろくて、楽しんで学ぶことができました」、「連携についての概念を整理できたことが良かった」など、先生の講義内容が素晴らしかったこと、また「多職種の方々の各々の立場からの意見が伺えよい学習ができた」、「シンポジウム事例を使ってそれぞれの職種の意見や気づきが聞けて大変勉強になった」など、多職種連携について多くのことを学び取ってもらえた様子が伺えました。

3) 公開講座① 発達障がいに関する公開講座

(1) 概要

タイトル：「発達障がいの特性の理解と支援」
 日時：2013年6月15日（土）13時30分～15時30分
 講師：和久田 学 氏（一般社団法人子ども発達科学研究所 浜松オフィス所長）
 対談者：大場 義貴（本学社会福祉学部社会福祉学科准教授）
 対象：一般の方
 定員：200名 参加：213名 申込：249名
 アンケート回収：174件

(2) 参加者職業内訳（合計213名）



「学校関係者」の内訳

幼稚園教諭	30名
小学校教員	16名
中学校教員	6名
高等学校教員	2名
大学教員	2名
放課後児童クラブ指導員	13名
相談員・スクールカウンセラー	3名
特別支援学校	2名

「保健医療福祉の専門職」の内訳

保育士	19名
看護師	10名
助産師	1名
就労継続支援事業所勤務	7名
障がい者(児)福祉施設勤務	8名
ひきこもり相談支援事業所勤務	4名
老人福祉施設勤務	11名
その他	9名

(3) アンケート結果

設問 1. 参加しようと思った理由、目的は何ですか？

「職場で発達障がい子どもたちにどのような接し方や声掛けをしたらよいかを考える手がかりにしたかった」、「発達障がいの知識を深め、スキルアップをしたかったので」、「発達障がいについて更なる理解と支援の方法を学びたかった」など、現在、発達障がい児者とかかわる職場にいるため、知識を得て今後役に立たい、と考えている方が多かったほか、「和久田先生が講師だから」、「和久田先生から発達障がいに関する最新の情報を得たかった」という、講師に対する期待の声も多く聞かれました。

設問 2・3 目的は達成できましたか？ その理由

84%の方が「達成できた」と回答しました。「期待していた以上に詳しい具体例や新しい知見を聞けて、とてもためになった」、「困難を抱えている生徒への接し方が分かり、今後の対応について見通しが持てた」、「自分の関わり方が悪いのではと日々思っていたが、前に進もうという気持ちになれた」など、参加者の方々の励みとなったことが伺える声が多く挙がりました。「達成できなかった」と答えた方も、「短い時間で理解できるものではないので。もっと具体例が聞きたかった」などの前向きなご感想でした。

設問 4 今回の講座の感想

「楽しかった」、「とても分かり易くよく理解できた」、「時間を忘れて話に集中した」、「もっと先生の話を聴きたかった」など、先生の講義内容が素晴らしかったこと、また、「視野が広がった」、「発達障がいとの相互作用や支援方法が細かく理解できた」、「今回の講座を今後活かせるよう努力し、周囲にも啓発していこうと思った」、「この講座で学んだ事を支援の中でいかし、利用者のできることを増やしていきたいと思った」など、今後の障がい者支援の参考として多くを学び取ってもらえた様子が伺えました。

4) 公開講座② 健康長寿に関する公開講座

(1) 概要

タイトル：「“健康で長生き”のための生活術」(全3回)

各回のテーマ・日時・講師：

	第1回	第2回	第3回
テーマ	高齢期のセルフケアを 楽しもう	自力で歩き 続けましょう	認知症、寝たきりに ならないための生活習慣
日付	11月11日(月)	11月18日(月)	11月25日(月)
時間	18:00~19:30	18:00~19:30	18:00~19:30
講師	社会福祉学部 介護福祉学科 杉山 せつ子 講師	社会福祉学部 介護福祉学科 野田 由佳里 准教授	社会福祉学部 介護福祉学科 中村 京子 教授

対象：一般の方

定員：各回 50名 【全3回延べ】参加：60名 申込：78名

【第1回】参加：23名 申込：24名

【第2回】参加：18名 申込：26名

【第3回】参加：19名 申込：28名

アンケート回収：

【第1回】22件

【第2回】17件

【第3回】14件



第1回



第2回



第3回

(2) アンケート結果

設問1. 参加しようと思った理由、目的は何ですか？

「まだまだ元気でいたいと思い参加した」、「60歳過ぎてから長く歩く事が少しずつできなくなってきた。今歩ける力を長く続けるにはどうしたらよいかと参加した」、「まわりの方々に迷惑をかける量を少なくしたいため」など、これからの生活を健康でよりよいものにするために参考にしたいという声が8割を占めました。また、「援助する側として、当事者がいかにセルフケアに取り組むのかを知る事で今後の援助を良いものにしたい」、「デイサービスに勤務していますが、利用者様がより快適に日々の生活を過ごされるようにと思い受講した」などのように、仕事に役立てたいと言う声もありました。

設問2・3 目的は達成できましたか？ その理由

「大いに達成できた」「ほぼ達成できた」との回答は、第1回：71%、第2回76%、第3回79%でした。第1回「日常生活の中で手軽にできるセルフケアを知ることができた」、「理論に基づいた具体的実施、手順、方法について理解でき、実行できると思った」など、具体的な事案が聞けて分かりやすかったことについて満足の声が多かったです。第2回「歩くことが楽しくなりそう」、「無理せずに日常の歩行の意識を持つことの大切さが勉強になった」など、楽しく具体的に日々の体の動かし方を学ぶことができた様子が伺えました。第3回「筋トレ、脳トレ、色々なトレーニングを教えて頂き、心身共に健康な一生を送りたいと思った」、「老年症候群の理解と健康寿命を上げるための知識を知ることができた」など、具体的に知識を得ることができ、今後実践できることについて満足度の高い声が多く聞かれました。

設問4 今回の講座の感想

第1回「先生のお話が楽しくビデオも見て、音楽も聞き楽しい時間でした」、「家で実践できると思える有益な講座だった」第2回「体の動かし方が分かった、日々の健康管理に役立てたい」、「楽しかった」、「仕事に役立てたい」第3回「大変細かいことまで指導されて良かった。資料を参考に生活に取り入れていきたい」、「先生のお話がとても分かり易く、楽しく聞かせて頂きました」など、多くの参加者の方から満足度の高い感想をいただきました。

3. 研修会講師等派遣

当センターが窓口となり、静岡県内で実施した講師等派遣の一覧です。

※担当教員の所属・職位は2013年度当時

1) 専門職対象

No	主催	内容	担当
1	静岡県西部西部糖尿病看護研究会	第24回静岡県西部糖尿病研究会 テーマ：バンデュラ“自己効力理論”の看護への応用 対象：糖尿病看護に関心のある看護師	看護学部 木下幸代 教授
2	医療法人社団 白梅会	職員対象勉強会 テーマ：身体拘束廃止について 対象：施設職員	看護学部 野崎玲子 准教授
3	好生会 三方原病院	院内研修会「人格障害の看護」 テーマ：パーソナリティー障害の特徴的な行動とその理解の方法 対象：精神科看護師・PSW・心理士ほか	看護学部 清水隆裕 助教
4	特例社団法人日本精神科看護技術協会 静岡支部	研修会「看護研究の基礎知識」 テーマ：看護研究の取り組み方、論文の書き方、発表の仕方 対象：精神科看護師	看護学部 清水隆裕 助教
5	医療法人社団 種光会 朝山病院	看護事例検討会 テーマ：事例検討の書き方・発表方法について 対象：院内看護師	看護学部 清水隆裕 助教
6	聖隷三方原病院	院内研修会「精神力動的な疾患の理解と看護」 テーマ：精神病とパーソナリティー障害の心のあり方 対象：精神科看護師ほか	看護学部 清水隆裕 助教
7	医療法人社団 リラ 溝口病院	院内研修会 テーマ：精神科看護者として大切なこと 対象：看護師・看護助手	看護学部 清水隆裕 助教
8	好生会 三方原病院	精神看護の講演会 テーマ：精神看護の基本となるもの<認知症を含む> 対象：精神科看護師	看護学部 清水隆裕 助教
9	静岡大学	静岡大学教員免許状更新講習 テーマ：養護教諭の専門性 対象：養護教諭	看護学部 高橋佐和子 助教
10	御殿場市教育研究会	御殿場市学校保健部会・学校保健講演会 テーマ：養護活動の記録と評価 対象：御殿場市内の小中学校養護教諭	看護学部 高橋佐和子 助教
11	聖隷福祉事業団 厚生園	磐田市幼稚園保育園主任者研修会 テーマ：子どもの発達を理解する～正常発達の子どもの発達を学ぶ～ 対象：磐田市の幼稚園保育園教諭	社会福祉学部 社会福祉学科 藤田美枝子 教授
12	保育制度を考える会・浜松	第5回学習会 テーマ：子ども子育て新制度で浜松の保育はどうなる？児童養護と保育園の役割 対象：保育関係者	社会福祉学部 社会福祉学科 藤田美枝子 教授

No	主催	内容	担当
13	静岡県家庭裁判所	静岡県家庭裁判所主催研究会 テーマ：ロールシャッハテストを実施した事例におけるフィードバックのあり方まで含むケース検討 対象：少年係家庭裁判所調査官	社会福祉学部 社会福祉学科 藤田美枝子 教授
14	浜松市不登校児支援協議会	適応指導教室におけるスーパーバイズ 内容：適応指導教室指導員への指導	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
15	磐田市民生委員児童委員協議会・障害児者福祉部	精神障がい者の福祉についての研修会 テーマ：精神障害福祉の理解を深める 対象：障害者福祉部会会員	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
16	ACT全国研修実行委員会	第5回ACT全国研修会 テーマ：「初期介入」座長 対象：福祉・医療の専門職者	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
17	浜松市精神保健福祉研修会ゆいま～ら	精神保健福祉に関する資質向上を目的とした研修会 テーマ：浜松市の保健福祉の変遷とこれからの精神保健福祉 対象：浜松市職員	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
18	浜松市社会福祉施設協議会	施設職員研修会 テーマ：障害者の地域支援 - 問と解のハザマで～精神障害者の支援を通して～ 対象：施設職員	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
19	静岡県救護再生施設連絡協議会	介護職員研修会 テーマ：専門家としての成長の「節目」に出会う体験の吟味について 対象：救護施設に勤務する介護職員	社会福祉学部 社会福祉学科 福田俊子 准教授
20	浜松NPOネットワークセンター N-Pocket	静岡県ジョブコーチ養成事業2013 テーマ：メンタルヘルス、精神障害者の支援 対象：ジョブコーチインターン・メンター	社会福祉学部 社会福祉学科 佐々木正和 助教
21	社会福祉法人 三幸会 特別養護老人ホーム山崎園	施設内研修会 テーマ：グループワーク「介護職にとっての接遇マナー」 対象：施設職員	社会福祉学部 介護福祉学科 中村京子 教授
22	デンマーク牧場福祉会 ディアコニア	職員対象研修会 テーマ：介護施設の利用者にとって良い介護とは 対象：介護職員	社会福祉学部 介護福祉学科 中村京子 教授
23	地域包括支援センター細江	地域ケアマネジャー演習事業 テーマ：生活援助者としての基本姿勢～高齢者とその家族の支援を考える～ 対象：介護支援専門員ほか	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 准教授
24	磐田市ケアマネ連絡会	磐田市ケアマネ連絡会研修会 テーマ：スーパーヴィジョンについて 対象：磐田市内のケアマネジャー	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教

No	主催	内容	担当
25	中東遠地区職種別(相談員)研究会	中東園地区相談員研修会 テーマ：生活相談員の役割とは 対象：介護福祉施設の生活相談員	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
26	静岡県社会福祉協議会・静岡県社会福祉人材センター	平成25年度多職種連携講座 テーマ：多職種連携の基礎的知識～円滑に機能する組織を作るには～ 対象：老人福祉施設あ介護保険事業所に勤務の看護師・介護士	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
27	浜松市きらめき研究会	養護教諭対象事例検討会 テーマ：各校で苦慮している事例への対応・養護教諭としてできること 対象：浜松市内の小中学校養護教諭	社会福祉学部 こども教育福祉学科 石川瞭子 教授
28	静岡県公立・私立高等学校教諭自主研修会	生徒理解を深める事例検討会 テーマ：養護教諭の資質向上・生徒理解を深め保健室での相談活動を円滑にするための事例検討 対象：浜松市内の小中学校養護教諭・教諭	社会福祉学部 こども教育福祉学科 石川瞭子 教授
29	浜松市きらめき研究会	「家族面接」のロールプレイ研修会 テーマ：家族面接／家庭への介入について 対象：浜松市内の小中学校養護教諭	社会福祉学部 こども教育福祉学科 石川瞭子 教授
30	静岡県高等学校福祉教育研究会	教員対象研修会 テーマ：「音楽療法」の実際と効果について 対象：県内国公私立高校の福祉系教諭	社会福祉学部 こども教育福祉学科 店村真知子 准教授
31	一般社団法人静岡県理学療法士会	平成25年度 新人教育プログラム研修会 テーマ：統計方法論・クリニカルリーズニング 対象：新人理学療法士	リハビリテーション学部 理学療法学科 西田裕介 教授 吉本好延 准教授 根地嶋誠 助教 金原一宏 助教
32	浜松市リハビリテーション病院	第40回浜松リハビリテーションセミナー テーマ：慢性期の呼吸・循環障害を呈する患者への関わり方 対象：地域のリハビリテーション医療に携わる方	リハビリテーション学部 理学療法学科 有菌信一 准教授
33	聖隷福祉事業団 厚生園	磐田市幼稚園保育園主任者研修会 テーマ：運動機能の発達～感覚統合とアプローチ法～ 対象：磐田市の幼稚園保育園教諭	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授
34	静岡大学	静岡大学教員免許状更新講習 テーマ：作業療法からみた発達障害の理解と支援 対象：教員	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授
35	浜松市健康福祉部	乳幼児発達指導研修会 テーマ：乳児の定型発達について 対象：母子保健事業に従事する保健師ほか	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授
36	静岡県立浜松特別支援学校	特別支援学校教員への助言 テーマ：児童生徒に対する教育支援 対象：特別支援学校教員	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿 准教授

No	主催	内容	担当
37	蒲郡リハビリテーション 連絡会	定期勉強会 テーマ：注意機能が良く働く作業療法とは？～脳 血流の変化から予測する～ 対象：蒲郡リハビリテーション連絡会会員	リハビリテーション学部 作業療法学科 中島ともみ 助教
38	聖隷福祉事業団 厚生園	磐田市幼稚園保育園主任者研修会 テーマ：ことばの発達・子どもの見立てとアプ ローチ法 対象：磐田市の幼稚園保育園教諭	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 池田泰子 准教授
39	浜松市教育委員会	平成25年度 通級教室指導者研修【言語】 テーマ：構音障害に対する指導について 対象：通級指導教室担当教員および希望者	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 池田泰子 准教授
40	聖隷福祉事業団 厚生園	施設職員の資質向上を目的とした研修会 テーマ：①ことばの発達②アセスメント③構音・ 吃音④集団場面における言語発達支援⑤療育場面 観察 対象：児童発達支援事業の職員	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 池田泰子 准教授 足立さつき 講師
41	静岡県浜名特別支援学校	言語聴覚士研修会 テーマ：児童生徒の言語に関する支援・その捉え 方や支援方法について 対象：教職員	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 池田泰子 准教授
42	浜松市根洗学園	職員対象研修会 テーマ：コミュニケーションの発達を学ぼう～や りとり関係の視点から～ 対象：幼稚園教諭・保育士等	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 池田泰子 准教授
43	浜松市障害保健福祉課	手話奉仕員養成講座 テーマ：入門課程講義「聴覚障害者の基礎知識」 対象：手話奉仕員志願者	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 石津希代子 准教授

2) 一般の方対象

No	主催	内容	担当
1	静岡県中央子育て支援センター・静岡市社会福祉協議会	子育て講座 テーマ：子育てと応急手当 対象：一般の方	看護学部 市江和子 教授
2	浜松市引佐町田沢自治会	自主防災研修会 テーマ：AEDの使い方と救急蘇生法 対象：引佐町田沢地区住民	看護学部 松井謙次 講師
3	(16校)浜松市立北浜東部中学校・静岡市立観山中学校・浜松市立北浜北小学校・浜松市立気賀小学校・浜松市立細江中学校・浜松市立都田中学校・浜松市立鹿玉中学校・浜松市立犬居小学校・浜松市立都田小学校・浜松市立熊切小学校・浜松市立気田小学校・浜松市立中郡小学校・浜松市立大瀬小学校・浜松市立細江中学校・島田市立初倉中学校・浜松市立三方原中学校	県内小中学校で実施する健康教育の講演会 テーマ：思春期の心と体、望ましい生活習慣の定着～睡眠の大切さ、命を大切にしよう、やる気を育む褒めことば、メディアと上手に付き合おう、思いを上手に伝えよう、性について等 対象：児童生徒・保護者	看護学部 高橋佐和子 助教 伊藤純子 助教
4	磐田市民生委員児童委員協議会	民生委員対象研修会 テーマ：民生委員・児童委員に求められる地域福祉推進の基礎知識 対象：磐田市の民生委員・児童委員	社会福祉学部 社会福祉学科 佐藤順子 准教授
5	特定非営利活動法人てくてく	てくてく学習会 テーマ：ひきこもりが慢性化した時の家族の対応と他機関との連携は？ 対象：てくてく会員およびひきこもり当事者	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
6	浜松市浜松手をつなぐ育成会	青少年福祉ボランティアリーダー育成研修会 テーマ：ことばについて～援助技術に活かすために～ 対象：高校生以上の生徒・学生	社会福祉学部 社会福祉学科 佐々木正和 助教
7	静岡県遠江総合高等学校	特別授業「音楽療法」 テーマ：音楽療法と意義と実際について学ぶ 対象：ライフデザイン系生徒3年生	社会福祉学部 こども教育福祉学科 店村真知子 准教授
8	静岡県立磐田北高等学校	介護医療現場における音楽療法の実践を目的とした講演会 テーマ：音楽療法の意義・高齢者や障害者への音楽の効果・音楽療法の体験 対象：福祉科2年生(介護福祉士取得希望者)	社会福祉学部 こども教育福祉学科 店村真知子 准教授
9	天竜病院神経内科患者付添人の会	音楽療法の会 テーマ：患者への音楽的刺激・音楽療法による治療的ピアノコンサート 対象：神経内科の主に寝たきりの患者	社会福祉学部 こども教育福祉学科 店村真知子 准教授

No	主催	内容	担当
10	浜松市浜北区健康づくり課	浜北健康づくり連絡会 テーマ：ロコモを撃退！アクティブシニアのすすめ 対象：一般の方および関連職員	リハビリテーション学部 理学療法学科 大町かおり 教授
11	一般社団法人 静岡県理学療法士会	第13・14回公開講座 テーマ：筋肉の衰えを感じていませんか？～理学療法士とともに筋肉づくりを考えましょう～ 対象：一般の方、患者・患者家族等	リハビリテーション学部 理学療法学科 根地嶋誠 助教
12	労働組合JAM静岡	JAM静岡・共済事務担当者会議 テーマ：筋力低下の予防法とトレーニング 対象：30代後半から50代の男女	リハビリテーション学部 理学療法学科 根地嶋誠 助教
13	立正佼成会浜松教会	平成25年度社会福祉講演会 テーマ：痛みとの付き合い方を学ぶ 対象：主に50歳以上の男女	リハビリテーション学部 理学療法学科 金原一宏 助教
14	こども発達支援センター たつく	幼稚園・保育園に通いながら療育を受けている発達障害児および保護者への助言	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 足立さつき 講師

4. 保健医療福祉団体の委員等派遣状況

※担当教員の所属・職位は2013年度当時

No	内容	担当
1	浜松市介護認定審査会 委員 任期：2013年4月1日～2015年3月31日 主催：浜松市	看護学部 篁 宗一 准教授 野崎玲子 准教授 小池武嗣 助教 伊藤純子 助教 リハビリテーション学部 西田裕介 教授 大町かおり 教授 鈴木達也 助教 中村哲也 助教
2	静岡県医療審議会 委員 任期：2013年9月1日～2015年8月31日 主催：静岡県	看護学部 川村佐和子 教授
3	平成25年度静岡県専任教員養成講習会準備委員会 委員 任期：2013年9月5日～2014年3月31日 主催：静岡県健康福祉部	看護学部 酒井昌子 教授
4	牧之原市健康づくり推進協議会 委員 任期：2013年4月1日～2015年3月31日 主催：牧之原市	看護学部 鈴木知代 教授
5	浜松市国民健康保険運営協議会 委員 任期：2013年4月1日～2015年3月31日 主催：浜松市	看護学部 入江晶子 准教授
6	浜松市母子保健推進会議 委員 任期：2012年4月1日～2014年3月31日 主催：浜松市	看護学部 黒野智子 准教授
7	浜松十字の園・アドナイ館・第2アドナイ館 第三者委員 任期：2013年4月1日～2015年3月31日 主催：社会福祉法人 十字の園	看護学部 野崎玲子 准教授
8	浜松市精神医療審査会 委員 任期：2013年4月1日～2015年3月31日 主催：浜松市	看護学部 清水隆裕 助教
9	浜松市営住宅管理運営委員会 委員 任期：2011年7月1日～2013年6月30日 主催：浜松市健康福祉部	社会福祉学部 社会福祉学科 中村裕子 教授
10	平成25年度子ども・若者支援スーパーバイザー スーパーバイザー 任期：2013年8月1日～2014年3月31日 主催：浜松市子ども家庭部青少年育成センター	社会福祉学部 社会福祉学科 藤田美枝子 教授 大場義貴 准教授 佐々木正和 助教

No	内容	担当
11	浜松市社会福祉審議会 児童福祉専門分科会 会長および 児童処遇部会 部会長 任期：2013年4月1日～2014年3月31日 主催：浜松市こども家庭部	社会福祉学部 社会福祉学科 藤田美枝子 教授
12	浜松市地域福祉活動計画策定委員会 委員 任期：2013年4月1日～2014年3月31日 主催：浜松市社会福祉協議会	社会福祉学部 社会福祉学科 佐藤順子 准教授
13	日常生活自立支援事業契約締結委員会 任期：2013年4月1日～2015年3月31日 主催：浜松市社会福祉協議会	社会福祉学部 社会福祉学科 福田俊子 准教授
14	浜松市不登校児支援協議会 会長 任期：2013年4月1日～2014年3月31日 主催：浜松市	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
15	浜松市精神保健福祉審議会 委員 任期：2013年7月1日～2015年6月30日 主催：浜松市	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
16	平成25年度浜松市子ども・若者サポートネット代表者会議 子ども・若者支援アドバイザー 任期：2013年4月1日～2014年3月31日 主催：浜松市子ども家庭部青少年育成センター	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
17	浜松市ひきこもり地域支援センター企画検討委員会・ 浜松市地域若年者就労支援推進協議会 委員 任期：2013年4月1日～2014年3月31日 主催：浜松市健康福祉部	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
18	平成25年度子どものこころの健康づくりワーキング会議 委員 主催：浜松市精神保健福祉センター	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
19	浜松市人権施策推進審議会 委員 任期：2012年4月1日～2014年3月31日 主催：浜松市	社会福祉学部 介護福祉学科 横尾恵美子 教授
20	浜松市ユニバーサルデザイン審議会 委員 任期：2013年4月1日～2015年3月31日 主催：浜松市	社会福祉学部 介護福祉学科 中村京子 教授
21	浜松市社会福祉審議会 委員 任期：2013年4月1日～2015年3月31日 主催：浜松市	社会福祉学部 介護福祉学科 中村京子 教授
22	浜松市営住宅管理運営委員会 委員 任期：2013年7月1日～2015年6月30日 主催：浜松市健康福祉部	社会福祉学部 介護福祉学科 中村京子 教授

No	内容	担当
23	浜松市社会福祉審議会および福祉有償運送運営協議会 委員 任期：2013年4月1日～2015年3月31日 主催：浜松市	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 准教授
24	浜松市障害者虐待防止対策支援事業 アドバイザーおよび 平成25年度障害者虐待防止連絡会 委員 任期：2013年8月1日～2014年3月31日 主催：浜松市健康福祉部	社会福祉学部 介護福祉学科 野田由佳里 准教授
25	社会福祉法人七恵会 評議員 任期：2013年4月1日～2015年3月31日 主催：社会福祉法人 七恵会	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
26	社会福祉法人昴会 監事 任期：2012年10月1日～2014年9月30日 主催：社会福祉法人昴会	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
27	社会福祉法人みどりの樹 評議員 任期：2013年6月30日～2015年6月29日 主催：社会福祉法人みどりの樹	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
28	NPO法人遠州精神保健福祉をすすめる市民の会 監事 任期：2013年6月27日～2015年6月26日 主催：NPO法人遠州精神保健福祉をすすめる市民の会	社会福祉学部 介護福祉学科 落合克能 助教
29	浜松市障害者施策推進協議会 委員 任期：2012年5月11日～2014年5月10日 主催：浜松市	リハビリテーション学部 作業療法学科 田島明子 准教授

5. 研究支援実施状況

No	内容	担当
1	社会福祉法人小羊学園 平成25年度研究発表会 外部審査委員 小羊学園の施設・事業所より6題の研究発表に係る審査 場所：小羊学園 三方原スクエア	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
2	医療法人好生会 はまかぜ 施設職員の研究発表に対する指導 期間：2014年3月1日～3月31日	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴 准教授
3	浜松市根洗学園 併行通園支援事業 期間：2013年7月1日～2014年3月31日（期間中10回程度）	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 足立さつき 講師
4	浜松市根洗学園 園児の聴力検査および共同研究 期間：2013年7月1日～2014年3月31日（期間中5回程度）	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 石津希代子 准教授

6. 資料

(1) ニュースレター第5号 (年1回発行)

発行：2013年6月 11,000部

内容：

- ・副センター長挨拶 「地域のニーズに応えていきたい」
- ・地域と歩む研究紹介 「出張陶芸クラブの創設とその効果」
- ・地域と歩む活動紹介 「生徒理解を深めるための事例検討会」
- ・2013年度公開講座のご案内
- ・2013年度地域貢献事業研究費 採択研究一覧

配布先：

実習施設、就職施設、聖隷グループ、卒業生、同系他大学、臨床教授等、
市内図書館・公民館など

(2) チラシ制作

①公開セミナー・公開講座の案内

種類	講座タイトル
公開セミナー	介護事業におけるリーダーシップ ～何のために、何を目指して～
公開セミナー	多職種連携により認知症・地域包括ケアの 困難事例に立ち向かう
公開講座	発達障がいの特性の理解と支援
公開講座	“健康で長生き”のための生活術

②2013年度地域貢献事業研究報告会の案内

(3) ホームページの更新

URL: <http://blg.seirei.ac.jp/healthscience/>

大学ホームページ(<http://www.seirei.ac.jp/>) ⇒社会との連携 ⇒保健福祉実践開発研究センターからリンクしています。



地域と歩む

聖隷クリストファー大学

保健福祉実践開発研究センター

Community-Based Practice and Research Center for Health and Welfare

カテゴリ

ニュース

ウェブページ

保健福祉実践開発研究センター概要

地域貢献事業研究費

公開セミナー・公開講座

講師・委員等の派遣

保健福祉実践開発研究センターへの依頼

リンク

聖隷歴史資料館

聖隷クリストファー中・高等学校

クリストファーこども園

聖隷クリストファー大学

« 市民公開講座『健康で長生きのための生活術』を開催しました | メイン | 6/14(土)公開セミナー「対人援助の現場でいかずリーダーシップを磨こう！」の受付を開始しました »

2013年12月24日 (火)

専門職向け公開セミナー『多職種連携により認知症・地域包括ケアの困難事例に立ち向かう』を開催しました

12月14日(土)、保健医療福祉の専門職の方々を対象とした公開セミナー『多職種連携により認知症・地域包括ケアの困難事例に立ち向かう』を、国立長寿医療研究センター内科総合診療部長の遠藤英俊先生を講師にお迎えして開催しました。

第1部は遠藤先生による基調講演、第2部は遠藤先生がファシリテーターとなり、社会福祉士・看護師・介護福祉士・言語聴覚士・作業療法士の方々をシンポジストに迎えたシンポジウムを2つの事例を用いて行いました。

介護福祉士や看護師の方をはじめとした福祉・医療の専門職の方々101名が熱心に聴講されました。参加者アンケートでは、「シンポジウムでは事例を使ってそれぞれの職種の見解を聞くことができ様々な気づきがあった」、「これから連携方法を更に広げていくための手がかりをつかめた」など、多職種連携についての前向きな声が寄せられました。また、「遠藤先生のお話がとてもおもしろく、もっと長く講演を聞きたかった」という声が非常に多く、皆様が楽しんで学び取っていただけた様子が伺えました。



第1部 基調講演の様子

①ニュース記事の更新履歴

No.	更新日	ニュース記事タイトル
1	2013/4/30	2013 年度公開講座の受付を開始しました
2	2013/5/28	公開セミナー「介護事業におけるリーダーシップ」 申込受付中です
3	2013/6/20	公開講座「発達障がいの特性の理解と支援」を開催しました
4	2013/7/30	公開セミナー「介護事業におけるリーダーシップ」を開催しました
5	2013/9/20	11/2(土)地域貢献事業研究報告会《ラウンジ》へぜひご来場ください!
6	2013/10/9	公開講座『“健康で長生き”のための生活術』申込みを開始しました
7	2013/10/23	公開セミナー『多職種連携により認知症・地域包括ケアの困難事例に立ち向かう』の受付を開始しました
8	2013/11/27	公開講座『“健康で長生き”のための生活術』を開催しました
9	2013/12/24	公開セミナー『多職種連携により認知症・地域包括ケアの困難事例に立ち向かう』を開催しました

②更新ページ

- ・ 地域貢献事業研究
 - 2013 年度地域貢献事業研究費採択課題一覧を掲載
- ・ 公開セミナー・公開講座
 - 2013 年度公開講座案内を掲載、インターネット申込フォーム

③当センターへの問合せ方法

ホームページに問合せフォームを設置していますので、ぜひご利用ください。

URL : <http://blg.seirei.ac.jp/healthscience/form.html>

<p>カテゴリ</p> <p>ニュース</p> <p>ウェブページ</p> <p>保健福祉実践開発研究センター概要</p> <p>地域貢献事業研究</p> <p>公開セミナー・公開講座</p> <p>講師・委員等の派遣</p> <p>保健福祉実践開発研究センターへの依頼</p> <p>リンク</p> <p>聖隷歴史資料館</p> <p>聖隷クリストファー中・高等学校</p> <p>クリストファーこども園</p> <p>聖隷クリストファー大学</p>	<p>保健福祉実践開発研究センターへの依頼</p> <p>共同研究事業へのご参加や、研究支援、講師派遣、専門団体等への委員の派遣等のご相談は、下記にご連絡いただくか、申込フォームから送信してください。</p> <p>聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター 〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453 TEL: 053-439-1400 FAX: 053-439-1406</p> <p>http://blg.seirei.ac.jp/healthscience/</p>																								
	<table border="1"> <tr><td>貴団体名</td><td><input type="text"/></td></tr> <tr><td>担当部署</td><td><input type="text"/></td></tr> <tr><td>担当者名</td><td><input type="text"/></td></tr> <tr><td>郵便番号</td><td><input type="text"/></td></tr> <tr><td>都道府県</td><td>静岡県 ▼</td></tr> <tr><td>住所</td><td><input type="text"/></td></tr> <tr><td>電話番号</td><td><input type="text"/></td></tr> <tr><td>FAX番号</td><td><input type="text"/></td></tr> <tr><td>メールアドレス</td><td><input type="text"/> (確認)</td></tr> <tr> <td>分類</td> <td> <input type="checkbox"/> 共同研究事業 <input type="checkbox"/> 研究支援 <input type="checkbox"/> 審議会等委員の推薦 <input type="checkbox"/> 講師派遣 <input type="checkbox"/> その他 </td> </tr> <tr> <td>依頼内容</td> <td> 詳細(希望日時・期間、分野、人数等) <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> </td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;"> <input type="button" value="入力内容確認"/> <input type="button" value="リセット"/> </td> </tr> </table>	貴団体名	<input type="text"/>	担当部署	<input type="text"/>	担当者名	<input type="text"/>	郵便番号	<input type="text"/>	都道府県	静岡県 ▼	住所	<input type="text"/>	電話番号	<input type="text"/>	FAX番号	<input type="text"/>	メールアドレス	<input type="text"/> (確認)	分類	<input type="checkbox"/> 共同研究事業 <input type="checkbox"/> 研究支援 <input type="checkbox"/> 審議会等委員の推薦 <input type="checkbox"/> 講師派遣 <input type="checkbox"/> その他	依頼内容	詳細(希望日時・期間、分野、人数等) <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/>	<input type="button" value="入力内容確認"/> <input type="button" value="リセット"/>	
貴団体名	<input type="text"/>																								
担当部署	<input type="text"/>																								
担当者名	<input type="text"/>																								
郵便番号	<input type="text"/>																								
都道府県	静岡県 ▼																								
住所	<input type="text"/>																								
電話番号	<input type="text"/>																								
FAX番号	<input type="text"/>																								
メールアドレス	<input type="text"/> (確認)																								
分類	<input type="checkbox"/> 共同研究事業 <input type="checkbox"/> 研究支援 <input type="checkbox"/> 審議会等委員の推薦 <input type="checkbox"/> 講師派遣 <input type="checkbox"/> その他																								
依頼内容	詳細(希望日時・期間、分野、人数等) <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/>																								
<input type="button" value="入力内容確認"/> <input type="button" value="リセット"/>																									

電話でのお問合せ先 : 053-439-1400 (大学代表)



NEWS LETTER

聖隷クリストファー大学
保健福祉実践開発研究センター
Community-Based Practice and Research Center for Health and Welfare

ニュース
レター

2013.6
VOL.05



CONTENTS

保健福祉実践開発研究センター 副センター長挨拶	01
“地域と歩む” 研究紹介:『出張陶芸クラブの創設とその効果』	02
“地域と歩む” 活動紹介:『生徒理解を深めるための事例検討会』	03
2013年度公開講座のご案内／2013年度地域貢献事業研究費採択一覧	04

地域のニーズに応じていきたい

保健福祉実践開発研究センター副センター長 大場 義貴
社会福祉学部社会福祉学科 准教授

聖隷クリストファー大学では、建学の精神であるキリスト教精神による「生命の尊厳と隣人愛」に基づき、保健医療福祉の総合大学として人材育成を行っています。2009年に設置されました当センターの今年度の基本目標は、保健医療福祉分野に関する知的資源を地域に還元し、地域の保健医療福祉の質の向上に寄与することとしております。そのために、1) 地域との共同事業・研究の推進 2) 専門職研修の充実 3) 地域における相談窓口の役割強化 4) 地域の保健医療福祉の政策形成への参画を柱とした取り組みを実施いたします。また、次頁以降に、昨年度の取り組みの一部をご紹介しますのでご覧ください。

是非皆様に、当センターの諸活動をご活用いただき、“地域と歩む”センターとして、貢献して参りたいと思いますので、よろしく願いいたします。



大場義貴准教授が研究代表者として2009～2010年度に当センターの地域貢献研究事業費（現在は地域貢献事業研究費）の助成を受け事前調査・準備を行い、2011年6月に第1号が発行された浜松市版保健福祉新聞「らしく浜松」は2013年3月に第3号が発行されました。発達障がい児や身体、知的、精神障がい者らが自分“らしく”心豊かに暮らせるように、保健医療や福祉のさまざまな情報を掲載する市民向けの年2回刊紙です。

保健福祉実践開発研究センターとは

「地域と歩む」をキーワードに、保健医療福祉の実践現場との共同研究・共同事業、地域の専門職向けの研修や一般市民の方々への学習機会の提供、地域の自治体や専門分野に関わる団体への協力、地域に開かれた相談窓口等を通して、地域の保健医療福祉のさらなる質の向上に寄与するための活動に取り組んでいます。



01



研究紹介

出張陶芸クラブの創設とその効果

研究協力者の所属	浜松十字の園、白梅ケアホーム、憩いの家だいま、ワークセンター大きな木、はるのケアセンター、山の手倶楽部
研究課題名	2011年度採択「出張型陶芸クラブの創設」 2012年度採択「出張型陶芸クラブの効果に関する探索的研究」
対象地域	浜松市

研究代表者

リハビリテーション学部
作業療法学科

鈴木 達也 助教

専門:作業療法、高齢者、地域生活



本研究は本学作業療法学科の設備である陶芸窯を活用したものです。教員と学生ボランティアが必要な用具を持って施設に赴き、参加者の作品を大学の窯で焼き上げる「出張陶芸クラブ」を行いました。2011年度は出張陶芸クラブの創設として行い、2012年度は活動継続とその効果に関して職員の皆様にアンケート調査を行いました。2年間の出張陶芸回数は9施設で40回。高齢者施設を中心に約250名の方々に作品を作っていただきました。

アンケート結果では出張陶芸、学生ボランティアについて9割以上の人が「良い」と肯定的な回答がされていました。自由回答欄には「普段帰宅願望のある人が楽しそうに一生懸命参加していた」、「作品を地域の文化祭に展示した」、「学生との交流にいきいきとしていた」など、今回の出張陶芸を通して一人一人に様々な効果があることが明らかになりました。これからも地域の皆様と共に歩めるような研究事業を進めてまいります。

研究協力者の方より

「出張陶芸に参加させていただき、普段とは違った利用者の真剣な姿を見ることができ大変うれしく思います。作品を自分の手で成形して、色付けや模様を決めてできた作品を手にした時の表情はとてよかったです。また麻痺のある方、作業に対して前向きに取り組めない方に対しても先生をはじめ、学生さんが上手に指導していただき取り組むことが出来たと思います。本当にありがとうございました。」

白梅ケアホームデイケア 看護師 佐野 美幸様



地域貢献事業研究費 2013年度報告会のご案内

2012年度に地域貢献事業研究費採択をされた研究事業6件のポスター発表を右記の通り開催します。

聖灯祭・ホームカミングデーとの同日開催です。ぜひお立ち寄りください。

日時:2013年11月2日(土)10:00~15:00(予定)

場所:聖隷クリストファー大学

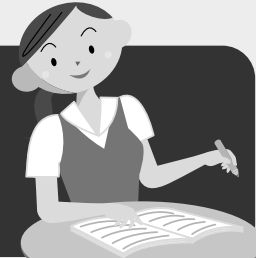
※詳細は保健福祉実践開発研究センターのホームページ等でご案内いたします。



活動紹介

生徒理解を深めるための事例検討会

静岡県公立・私立高等学校養護教諭自主研修会と浜松市きらめき研究会（浜松市立小中学校養護教諭自主研究会）からの依頼を受け、本学社会福祉学部こども教育福祉学科石川瞭子教授がアドバイザーとなり、「生徒理解を深めるための事例検討会」を2011年度より月1回程度（金曜夜18:30～21:00）、継続して開催しています。



Q 活動内容について教えてください。



相談内容に熱心に耳を傾ける石川瞭子教授（写真中央）

主に浜松市や浜松市外の小・中・高等学校の養護教諭・担任・スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカー・生徒指導教諭等が定期的に集まって事例検討をする研究会です。他に児童家庭福祉相談として幼稚園・保育園等の保育士・教諭等の関係者による自主勉強会があります。

平日夜、多くの参加者は1時間かけて勤務後に駆け付け、毎回20名前後で開催しています。実際に進行形の実例の検討をしますので、白熱した議論が展開され、2時間半という時間はあっという間です。参加者全員が議論に参加します。

Q どのような事例を取り上げているのですか。

事例の内容は、精神障がい・虐待・不登校・いじめ問題・暴力・自傷他害という旧来からの問題のほか、新しい問題として発達障がい・DV・依存・ネット等をめぐる諸問題が絡み合い、複雑な様相を呈しています。

検討事例は参加者が持ち寄りますが、参加者が答えを持ち帰ることよりも、問題に対峙する姿勢や心構え、理解するための情報や勇気をもらうための仲間作りが主な目的です。本学の看護学部教員も参加し、地域との連携を強化しています。現場関係者ならどなたでも参加できます。

事例検討会に関するお問い合わせ

✉ 連絡先 ryoko-i@seirei.ac.jp

参加者様の方より

「さまざまな問題を抱えた子どもたちの自立と幸せを願う養護教諭にとって、石川先生の事例検討会は、毎回“目から鱗”です。

経験値からしか対応できない事例に、仮説で思考の柔軟性を持たせ、入り込めないと感じていた家族の関係を理解することで、対応を考え、学ぶ機会となっています。週末の仕事帰り、やる気をもらえる貴重な研修会です。」



事例検討会の様子

2013年度公開講座のご案内

主に一般の方向けの講座を「市民公開講座」、主に専門職者向けの講座を「公開セミナー」として開催いたします。詳細はホームページに順次掲載いたします。インターネットまたはFAXでお申し込みください。多くの皆様方のご参加をお待ちしております。

市民公開講座	① 発達障がいに関する講座 (終了しました)		② 高齢者に関する講座 (全3回)	
	テーマ	発達障がいの特性の理解と支援	テーマ	“健康で長生き”のための生活術
	日時	2013年6月15日(土) 13:30~15:30	日時	2013年11月11日(月)・11月18日(月)・11月25日(月) 19:00~20:30(予定) (※1回のみ参加でも結構です)
	講師	和久田 学氏(子どもの発達科学研究所 浜松オフィス所長、 大阪大学大学院 連合小児発達学研究所 特任講師)	講師	本学社会福祉学部介護福祉学科 教授 中村京子、准教授 野田由佳里、講師 杉山せつ子
	対象	発達障がいに関心のある一般市民の方、専門職者の方など	対象	健康長寿・介護等に関心のある一般市民の方などでも
場所	聖隷クリストファー大学	定員	各回50名程度	
		場所	聖隷クリストファー大学	
公開セミナー	① リーダーシップに関する講座		② IPW(専門職連携)に関する講座・ワークショップ	
	テーマ	介護事業におけるリーダーシップ ～何のために、何を指して～	テーマ	多職種で考える困難事例(仮)
	日時	2013年7月20日(土) 13:30~15:30	日時	2013年12月14日(土) 13:30~16:30
	講師	高橋 義孝氏(株式会社ケアクオリティ 代表取締役社長、 社会福祉士、介護支援専門員)	講師	遠藤 英俊氏(国立長寿医療研究センター内科総合診療部長)
	対象	保健・医療・福祉の専門職の方、職場でのリーダーシップに関心のある方	対象	主に保健・医療・福祉の専門職の方
定員	200名	定員	100名(予定)	
場所	聖隷クリストファー大学	場所	聖隷クリストファー大学	

講座参加申込みに関するお問い合わせ先

※申込み開始は講座開催日の約2ヶ月前からです。

インターネットからの申込みはこちら

FAXからの申込みはこちら

大学ホームページ ➡ 保健福祉実践開発研究センター ➡ 公開講座 FAX.053-439-1406

URL <http://www.seirei.ac.jp> 画面の案内に従って必要情報を入力後、送信してください。

FAX用紙はHPからダウンロードできます。

※FAXからのお申し込みの際には、氏名(フリガナ)・住所・電話番号・FAX番号・職業(勤務先)・申込講座名をお知らせください。

2013年度地域貢献事業研究費 採択一覧

2013年度は2013年2月に公募、4月に審査を行い、6件が採択されました。

区分A 地域の保健医療福祉の実践現場と共同で行う研究 **区分B** 地域との基盤作りとしての事業に関する共同研究

区分	研究課題名	研究代表者(所属)	対象地域
A	保健専門職に特化したクレームへの組織的対応研修の実施と評価	伊藤 純子(看護)	浜松市を中心として静岡県全域
	高齢者における身体機能・移動能力と運動時の疲労に対する適応能力に関する研究	西田 裕介(リハPT)	浜松市北区
	資格取得後の介護福祉士における職場定着を促進する要因に関する研究	野田 由佳里(介護)	静岡県全域
B	地域在住高齢者を支えるリハビリサポート体制の構築	金原 一宏(リハPT)	浜松市北区・中区
	地域における言語聴覚士の専門性の活かし方を検証 ～ことばの教室の先生を対象とした機能性構音障害のスキルアップ研修開講～	池田 泰子(リハST)	静岡県西部地域 (浜松市、磐田市、袋井市)
	発達障害をもつ児童への支援の確立、および少～青年期の支援研究	伊藤 信寿(リハOT)	浜松市

所属:看護=看護学部 リハ=リハビリテーション学部 PT=理学療法学科 OT=作業療法学科 ST=言語聴覚学科 介護=社会福祉学部介護福祉学科

【地域と歩む】保健福祉実践開発研究センター ニュースレター 第5号
発行 聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター

〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453 TEL:053-439-1400
FAX:053-439-1406 Eメール:health-science@seirei.ac.jp

聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター

公開セミナー 後援：浜松市

受講
無料

介護事業における リーダーシップ

何のために、何を目指して

開催
日時

7/20 土 定員 200名

13:30～15:30〔受付・開場 13:00〕

会場 聖隷クリストファー大学 1号館7階 1701大教室

対象 主に保健・医療・福祉の専門職の方、
職場でのリーダーシップに関心のある方

講演内容

リーダーシップとは、共に働く者の共通課題。

介護の世界のリーダーシップ。

リーダーシップを問うことは、生き方と社会を考えること。

介護事業で起業するという。その思いと確信。

あえて介護事業のニーズを問い直す。



講師 ^{たか はし よし たか}
高橋 義孝氏

株式会社ケアクオリティ 代表取締役社長
社会福祉士 / 介護支援専門員
公益社団法人 日本認知症グループホーム協会
東海北陸ブロック 理事・静岡県支部長

静岡市清水区出身。日本社会事業大学社会福祉学部卒業。国立医療病院管理研究所専攻課程修了。県社協職員、病院MSW、代議士秘書、独立型社会福祉士事務所、病院・施設開設請負などを経て、2008年、株式会社ケアクオリティ起業。グループホーム7カ所、有料老人ホーム、デイサービス運営。趣味はジャズサックス演奏。月1回ライブを行う。

当日生演奏があるかも!?



申込
方法

- インターネットの場合・・・聖隷クリストファー大学ホームページ(<http://www.seirei.ac.jp/>) → 公開講座から
 - FAXの場合・・・聖隷クリストファー大学保健福祉実践開発研究センター(053-439-1406)まで (裏面の申込み用紙をご利用ください)
- 氏名(ふりがな) ○住所 ○電話番号 ○FAX番号 ○PCメールアドレス ○職業 ○申込み講座名をお知らせください。

申込
締切

7/10 水

※申込締切日以降に受講票を送付いたしますので、当日お持ちください。



聖隷クリストファー大学
保健福祉実践開発研究センター

〒433-8558
静岡県浜松市北区三方原町3453

看護学部 / 社会福祉学部 / リハビリテーション学部 / 助産学専攻科
大学院博士前期課程・博士後期課程 看護学研究科 / リハビリテーション科学研究科 / 社会福祉学研究科

TEL.053-439-1400 FAX.053-439-1406 <http://www.seirei.ac.jp/>

交通の
ご案内

- バスでお越しの方
JR浜松駅北口バスターミナル15番ポール
「聖隷三方原病院経由気賀・三ヶ日行」
乗車「聖隷三方原病院」下車徒歩約3分。
- お車でお越しの方
聖隷クリストファー大学第1駐車場をご利用ください。

講料
無料

講演・シンポジウムを通し、
施設や在宅における
困難事例の分析から
多職種連携での課題を
明確にします。

多職種連携により 認知症・地域包括ケアの 困難事例に 立ち向かう



第1部 基調講演(13:30~14:30)



講師 **遠藤 英俊氏**

国立長寿医療研究センター 内科総合診療部長
1982年滋賀医科大学卒業、1987年名古屋大学医学部
大学院修了。その後、米国国立老化研究所客員研究員、
国立療養所中部病院内科医長などを経て、現在に至る。専門
は老年医学、認知症、回想法など。著者に「よくわかる認
知症Q&A」(中央法規)ほか中日新聞「認知症のはなし」の
連載執筆など多数。

第2部 シンポジウム(14:40~16:30)

ファシリテーター **遠藤 英俊氏**

看護師、介護福祉士、社会福祉士、理学療法士、言語聴覚士などの専門職者をシ
ンポジストに迎え、「医師による胃瘻造設と看取りを説明された本人・家族支援の
問題」や「糖尿病を合併した脳梗塞患者のリハビリ・家族支援」など、施設や在宅
における困難事例をテーマとする予定です。

申込
方法

- インターネットの場合…聖隷クリストファー大学ホームページ[<http://www.seirei.ac.jp/>] → 公開講座から
- FAXの場合…聖隷クリストファー大学保健福祉実践開発研究センター(053-439-1406)まで
(裏面の申込み用紙をご利用ください)
- 氏名(ふりがな) ○住所 ○電話番号 ○FAX番号 ○PCメールアドレス ○職業 ○申込み講座名をお知らせください。

申込
締切

12/3 火

※申込締切日以降に受講票を送付
いたしますので、当日お持ちください。

開催日時

12/14 土

13:30~16:30 (受付・開場13:00)

会場 聖隷クリストファー大学
1号館7階 1701大教室

対象 主に保健・医療・福祉の専門職の方
(同一施設から異なる専門職の
方がご参加されることを
推奨します)

定員
200名



聖隷クリストファー大学
保健福祉実践開発研究センター

〒433-8558
静岡県浜松市北区三方原町3453

看護学部/社会福祉学部/リハビリテーション学部/助産学専攻科
大学院博士前期課程・博士後期課程 看護学研究科/リハビリテーション科学研究科/社会福祉学研究科

TEL.053-439-1400 FAX.053-439-1406 <http://www.seirei.ac.jp/>

交通のご案内

- バスでお越しの方
JR浜松駅北口バスターミナル15番ホール
「聖隷三方原病院経由気賀・三ヶ日行」
乗車「聖隷三方原病院」下車徒歩約3分。
- お車でお越しの方
聖隷クリストファー大学第1駐車場をご利用
ください。

聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター

市民公開講座 後援：浜松市
(発達障害児者支援体制整備検討委員会)

受講
無料

託児あり

発達障がいの 特性の理解と支援

近年、学校現場をはじめ、社会的にも注目を集めている発達障がいは、「見えない障がい」であることから理解が難しく、適切な支援を受けられないために、行動上の問題や社会的な困難さに直面してしまうことが少なくありません。発達障がいのある人に対して、どのような支援が彼らと彼らの周りの人たちの幸せにつながるのか、現場での具体的取組の方法や、不登校、いじめ被害といった発達障がいのある人たちの抱えるリスクについて、話題にします。

定員
200名

開催
日時

6/15 土 13:30～15:30
〔受付・開場 13:00〕

会場 聖隷クリストファー大学 1号館7階 1701大教室

対象 発達障がいに関心のある一般市民の方、
専門職の方など、どなたでも

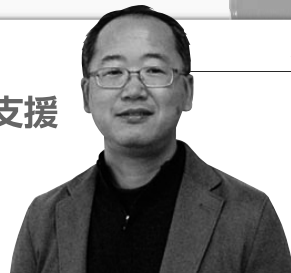
講座内容

1 基調講演

発達障がいの特性の理解と支援

講師 **和久田 学氏**

一般社団法人 子ども発達科学研究所 浜松オフィス所長
大阪大学大学院連合小児発達学研究所 特任講師
浜松医科大学 非常勤講師



和久田 学氏

浜松市出身。1986年静岡
大学教育学部卒業後、浜
松・天竜・浜名等で25年間
特別支援学校教諭を経て、
2011年大阪大学大学院
連合小児発達学研究所博
士後期課程修了(小児発
達学博士)、現在に至る。

2 対談『和久田学 × 大場義貴 』
本学社会学部社会学科 准教授
〔臨床心理学、精神保健ソーシャルワーク〕

不登校・ひきこもり、いじめの被害 ～発達障がい児の2次障がいとして～

申込
方法

- インターネットの場合…聖隷クリストファー大学ホームページ[<http://www.seirei.ac.jp/>] → 公開講座から
- FAXの場合…聖隷クリストファー大学保健福祉実践開発研究センター(053-439-1406)まで
(裏面の申込み用紙をご利用ください)
- 氏名(ふりがな) ○住所 ○電話番号 ○FAX番号 ○PCメールアドレス ○職業 ○申込み講座名をお知らせください。
- 託児ご希望の方は、下記問い合わせ先までご連絡ください。

申込
締切

6/6 木

※申込締切日以降に受講票を送付いたしますので、当日お持ちください。



聖隷クリストファー大学
保健福祉実践開発研究センター

〒433-8558
静岡県浜松市北区三方原町3453

看護学部/社会学部/リハビリテーション学部/助産学専攻科
大学院博士前期課程・博士後期課程 看護学研究科/リハビリテーション科学研究科/社会学部研究科

TEL.053-439-1400 FAX.053-439-1406 <http://www.seirei.ac.jp/>

交通のご案内

- バスでお越しの方
JR浜松駅北口バスターミナル15番ポール
「聖隷三方原病院経由気賀・三ヶ日行」
乗車「聖隷三方原病院」下車徒歩約3分。
- お車でお越しの方
聖隷クリストファー大学第1駐車場をご利用ください。

聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター 市民公開講座

あなたの健康を介護福祉学のエキスパートがサポートします！

“健康で長生き”のための生活術

日本は世界一の長寿国となりました。長生きすることは喜ばしいことです。しかし一方で、長患いをする人や介護を必要とする人が増えているのも現状です。せっかくなら健康で長生きしたいものですね。人間が人間らしく誇りをもって生きること、それが本当の意味での長寿です。今回の公開講座は、自立して健康に暮らせる期間をどう伸ばすか、その秘訣とコツを学びます。



参加
無料

後援：浜松市

日時・テーマ	内容	講師
第1回 2013年11月11日(月) 18:00～19:30 高齢期のセルフケアを楽しもう	こころとからだのメカニズムを知って、日々の生活の中で手軽に楽しくできるセルフケアを紹介します。	聖隷クリストファー大学 社会福祉学部 介護福祉学科 講師 杉山 せつ子
第2回 2013年11月18日(月) 18:00～19:30 自力で歩き続けましょう	無意識に行っている歩行のメカニズムを理解し、それぞれの身体能力に応じた「転ばない歩き方」について考えます。当日は動きやすい服装でご参加ください。	聖隷クリストファー大学 社会福祉学部 介護福祉学科 准教授 野田 由佳里
第3回 2013年11月25日(月) 18:00～19:30 認知症、寝たきりにならないための生活習慣	小さな生活習慣の変化で健康寿命を延ばすことができます。脳活・ストレッチ・正しい呼吸法を身につける方法を学びます。	聖隷クリストファー大学 社会福祉学部 介護福祉学科 教授 中村 京子

会場：聖隷クリストファー大学（浜松市北区三方原町3453）

お申し込み・問い合わせ先

聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター

TEL:053-439-1400 FAX:053-439-1406

〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453 <http://www.seirei.ac.jp/>

【申込方法】インターネットまたはFAXでお申し込みください。

○[大学ホームページトップ]⇒[保健福祉実践開発研究センター]⇒[公開講座]

○FAXでお申し込みの場合は、裏面をご利用ください。

【定員】

各回先着50名
※ いずれかの回のみのご参加でも結構です。

【申込期間】

10/10～10/25

聖隷クリスティー大学
保健福祉実践開発研究センター

地域貢献事業研究報告会

2013年11月2日(土) 聖灯祭・ホームカミングデーと同日開催
1号館4階 1409教室 にて!! 10:00～15:00

ポスター展示を見ながら
休憩スペースとしても
ご利用ください!
お茶・お菓子も
テイクフリー!



ヴァイオリン・ピアノ
ミニコンサート

11:10～11:30 (予定)

看護学部卒業生 伊藤ちささん
社会福祉学部 店村真知子 准教授

2012年度に実施された
地域貢献事業研究の
5件のポスター
を行います!

出張型陶芸クラブの
効果に関する
探索的研究

高齢者の居場所づくりによ
る街中にぎわい計画
—世代を超えた絆づくり—

地域在住高齢者を支える
リハビリサポーター
体制の構築

就労支援事業としての
水耕栽培の導入および
効果に関する調査研究

言語聴覚士は療育園の
療育においてどのような
役割を担えるか
～療育園指導員が在籍児
に言語調査を実施する
支援を通して～

地域貢献事業研究:

保健福祉実践開発研究センターが本学周辺地域の保健医療福祉分野に貢献する研究事業を対象として配分する『地域貢献事業研究費』により実施された事業研究のことです。
保健福祉実践開発研究センターは、「保健医療福祉分野に係るすべての人々たちとの共同事業・研究」を推進し、共同で課題解決を図ります。



2013年度 地域貢献事業研究 報告書



保健専門職が対応するクレーム特化型研修プログラムの共同開発

伊藤純子¹⁾、鈴木知代¹⁾、杉山眞澄²⁾、深江久代³⁾

¹⁾聖隷クリストファー大学、²⁾静岡県東部看護専門学校、³⁾静岡県立大学短期大学部

I. 研究の背景

「クレーム」とは要求そのものやその要求の正当性を主張することで、近年、住民の権利意識の高揚からか、行政機関へのクレームも増えていると言う声が聞かれている。そこで、研究者らは平成 21 年度に、A 県内市町の母子保健を担当する保健師を対象として、住民クレームに関する実態調査¹⁾を行った。この結果、クレームが保健師に様々な影響を与えることと、組織としての体制整備が不十分であることが明らかとなった。この調査結果を踏まえ、平成 23 年に、「クレーム対応研修」を企画・開催した。この研修の評価としては、個人のクレームに対応する技術の習得と援助技術の向上に留まり、組織体制改善に向けたアプローチが充分ではないという課題を残した。

そこで、新たに保健師が対応する機会の多い事例を作成し、演習を中心とした対応技術の習得と共に、クレームに組織で対応する必要性を盛り込んだ研修を計画し、実践、評価することで、研修プログラムの完成を目指すこととした。

II. 研究方法

1) プログラムの構成の検討

①保健活動に特化したクレーム対応の要点の分析

保健活動の場面で対応したクレーム事例とその対応の状況について、熟練者（保健活動経験 15 年以上の者）4 名に、半構造的面接法によりインタビュー調査を行った。データは KJ 法により分析し、個人・組織それぞれに必要なクレーム対応の要素を概念化した。

②プログラムの修正

研究者らが平成 22 年度に実施した研修プログラムを、前項の分析から得られた概念を取り入れて修正した。ワークシート、事例等の教材を開発し、2 回構成の研修を実施した。

2) 研修会の実施

①日程と内容（表 1）

平成 25 年 11 月 23 日、30 日の 2 日間、講師は民間研究機関と研究メンバーが担当した。

[表 1 研修日程と内容]

日程	時間	
平成25年11月23日(土)	9:30～	受付
	10:00～10:30	オリエンテーション(研究の説明, 事前アンケート)
	10:30～12:00 (昼 食)	クレームとは、クレーム対応の方法(講義)
	13:00～16:30	クレーム対応の 5 つのポイントと対応の基礎 (講義、グループワーク、ロールプレイ)
平成25年11月30日(土)	12:30～	受付
	13:00～13:10	オリエンテーション
	13:10～14:30	模擬事例の検討とロールプレイ (保健師個人の対応事例、組織的対応事例)
	(休 憩)	
	14:45～15:30	グループ検討と発表(組織的対応の要点)、まとめ
	15:30～15:50	クレーム対応のポイント(成功事例の分析から)
15:50～16:00	アンケート記入	

3) 調査方法

研修参加者を対象に研修前、直後、3 ヶ月後に、研究者らが作成した質問紙調査を実施した。研修受講の前後で、クレーム対応に対する自己効力感を比較した。質問紙は、研究者らが開発した対応の評価視点を用いた。対応は「受け止め（6問）」、「判断（3問）」、「実施（10問）」、「振り返り（4問）」の4段階からなる。各段階で「自分はどの程度、適切に対応することが出来るか」に対する自己効力感を100点満点としてVASスケールで測定した。分析にはSPSS19.0を使用した。

4) 倫理的配慮

本研究は聖隷クリストファー大学倫理委員会の承認を得た方法を遵守して実施した。

Ⅲ. 結果

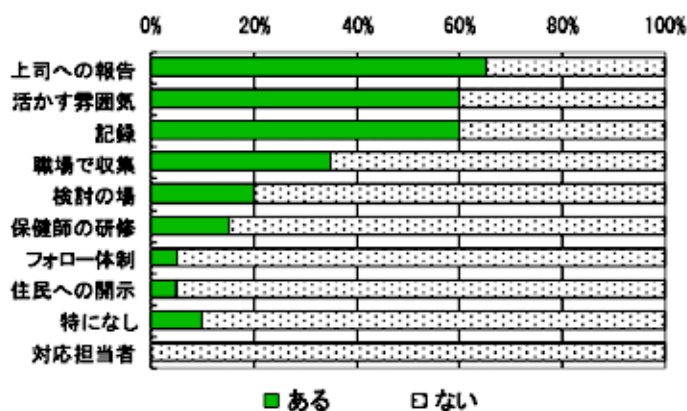
1) 参加者の概要

- ・参加者：20人（内訳：20歳代10人、30歳代6人、40歳代1人、50歳代3人）
- ・経験年数：9.8±10.77年
- ・参加者全員に勤務中にクレームを受けた経験があり、受けたクレーム件数の平均は5.1件であった。

2) 参加者のクレームに関する職場体制

上司へ報告する体制、クレームを活動に活かす体制、記録をとることは60%以上できていたが、クレーム対応の担当者の設置はなく、クレームを受けた保健師へのフォローや住民への回答の開示は10%以下であった(図1)。

[図1 所属組織のクレーム対応体制]



3) 研修前後の自己効力感

研修前と直後の比較では、研修直後のクレーム対応への自己効力感の総得点の平均は18.6pt上昇した。全項目で上昇し、対応のあるt検定の結果では、全23項目中18項目で有意差が認められた。各カテゴリーの前後比較では、「振り返り」が+23.1ptで最も上昇した。各カテゴリーの中で、前後で最も得点差があった項目は、「受け止め」では[申し立て者の心情の理解を伝える(+31.7pt)]、「実施」では[相手に申し立てが有意義であったと意思表示できる(+26.3pt)]、「振り返り」では[クレーム対応方法が適切か振り返る(+29.7pt)]であった。

変化が少なかった項目は[上司へ報告ができる(+2.8pt)]、[クレーム対応の状況を記録として残せる(+5.7pt)]であった。研修後も自己効力感が70pt以下の項目は[申し立て者が大事と思っていることを引き出せる(69.3pt)]、[怒りの発散を受け止めて冷静に聞く(68.7pt)]、[具体的な解決策を提示できる(66.0pt)]、[継続支援に繋がられる(69.3pt)]であった。

[表 2 研修前後の自己効力感の変化]

項目別得点前後比較 (全く思わない0～非常に思う100点)				対応のあるt検定結果				
	設 問	前	後	差	t値	自由度	有意確率 (両側)	
受け止め	自分が対応しようとする心構え	57.7	81.0	23.3	-4.999	15	0.000	**
	申し立てを最後まで聞く必要がある	69.7	94.0	24.3	-6.622	15	0.000	**
	心情を理解していることを伝える	63.0	94.7	31.7	-7.590	15	0.000	**
	相手の背景に注目して対応	54.3	73.7	19.3	-6.966	15	0.000	**
	クレームを受け、ダメージを感じる	77.3	67.3	-3.6	1.199	15	0.249	
判断	クレーム対応が業務や組織改善につながる	79.0	88.0	9.0	-2.098	15	0.053	
	何が問題になっているかアセスメントする	64.0	79.0	15.0	-4.739	15	0.000	**
	クレーム原因を明らかにするよう努める	63.7	77.3	13.7	-4.580	15	0.000	**
実施	要領は何か明らかにしながら対応する	68.7	78.0	9.3	-2.660	15	0.018	*
	まず、不快にさせたことを謝罪できる	71.7	89.3	17.7	-3.967	15	0.001	**
	相手が大事に思っていることを引き出す	46.0	69.3	23.3	-6.383	15	0.000	**
	怒りの発散を受け止め、冷静に聞く	54.7	68.7	14.0	-3.563	15	0.003	**
	必要時、具体的な解決策を提示できる	48.0	66.0	18.0	-4.498	15	0.000	**
	必要時、継続支援につなげられる	48.7	69.3	20.7	-3.841	15	0.002	**
	必要時、他者と連携して対応できる	70.3	80.7	10.3	-3.597	15	0.003	**
	上司へ報告ができる	86.9	89.7	2.8	-0.959	15	0.353	
	相手に申し立てが有意義だったと意思表示できる	48.3	74.7	26.3	-5.980	15	0.000	**
	クレーム対応の状況を記録として残す	76.3	82.0	5.7	-1.496	15	0.155	
振り返り	不手際の場合、再発防止の意志を伝えられる	71.7	82.0	10.3	-2.017	15	0.062	
	クレーム対応の方法が適切だったか振り返られる	49.0	78.7	29.7	-6.714	15	0.000	**
	クレームにより自分の援助技術を振り返られる	57.0	79.3	22.3	-4.954	15	0.000	**
	クレームにより業務上の問題点の見直しができる	57.7	81.0	23.3	-6.383	15	0.000	**
	クレーム再発防止策を職場内で検討できる	55.7	72.7	17.0	-3.267	15	0.000	**

※spss19.0を使用

**< p.01 * < p.05

IV. 考察

研修前後の比較で自己効力感は上昇し、研修プログラムの効果が認められた。カテゴリー別での「振り返り」の上昇が最も高かった理由は、研修プログラムの中で事例検討・ロールプレイ・グループによる振り返りの一連を体験したことにより、振り返りの重要性を実感できたためと考える。研修前後であまり差がなかった上司への報告やクレーム対応の記録は、既に職場で行われているためと考える。

学習・実際の体験・振り返りのサイクルが対応への自己効力感を高めることから、クレーム対応技術の習得には本プログラムによる研修に加え、職場で実際にクレーム対応をした場合、振り返り、対応方法を見直す体制が整備される必要があると考える。

V. まとめ

今後、研修3ヶ月後のアンケートの分析結果を踏まえ、研修の成果や課題を明らかにした上で、今回のプログラムの再修正を行う予定である。

ほとんどのクレームはサービスの質の向上に期待する住民からの声、あるいは住民ニーズの現れや何らかの支援が必要な兆候でもある。クレーム対応への意識啓発や技術の習得、組織体制づくりに一層取り組む必要があると考える。

クレーム対応は、保健師としての態度や力量を客観的に省み、成長のきっかけにできる好機である。今後は行政や保健の現場においてもクレーム対応を通じた業務改善や職場教育の風土が培われるために本研究の成果を活かして行きたい。

本研究の成果は、既に一部を第2回日本公衆衛生学会（2014年1月）で発表し、第3回日本看護公衆衛生学会（2015年1月）において総括を発表する予定である。

最後に本研究にご協力いただいた保健師の皆様に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 深江久代, 杉山真澄他: 市町の母子保健事業に関する住民からのクレーム(苦情)の実態と保健師の受け止め, vol.68 (5) . 424 - 432, 保健師ジャーナル, 2012.

介護福祉士資格取得後に職場定着に影響を及ぼす促進要因に関する研究

野田由佳里*¹⁾、及川ゆりこ²⁾、櫻井知世²⁾、杉本洋子²⁾

杉山弘卓²⁾、関根美恵子²⁾、水野公智²⁾、山畑晋也²⁾

1) 聖隷クリストファー大学、2) 一般社団法人静岡県介護福祉士会調査研究委員会

I. 研究目的

一般社団法人静岡県介護福祉士会 調査・研究委員会は、県内に居住する若しくは従事する介護福祉士の有志メンバーで構成されている。調査・研究委員会としては、2012年度に、介護の専門的見地に立ち、目の前の介護現場の状況把握、自らが行っている介護の検証、認知症ケアやターミナルケアなど介護の専門的研究、これからの介護福祉分野の動向や技術の向上、機器の開発等様々な研究の機会を持つため、2012年10月に有志メンバー39名で静岡県介護福祉士会研究調査委員会を立ち上げ、翌月11月から活動を開始している。当初は、静岡県介護福祉士会が独自に毎年行っている就業実態調査の分析など委託された活動が主であったが、2013年度計画として、資格取得後の介護福祉士における職場定着を促進する要因に着目し、

- ・意欲を引き出す関わりを意識化（可視化）できるツール作り
- ・認知症ケアにおける「生活歴」に特化したアセスメントツール作り

の二本柱を立てた活動に着手することとなった。本研究は後者のワーキンググループの活動報告第一報である。

ワーキンググループのメンバー（以下 WG メンバーと表記する）は、ケアの素晴らしさを自ら感じ、一方で深刻な人手不足や介護職自身の力量不足を問題意識として持っている者で構成され、話し合いを進める中で現任者のアセスメント能力がケアの低下を招くという共通の危惧を抱いている。

介護の仕事は、「関心を寄せ、気をつかい、そばにいて何かを感じ取る」¹⁾ 繊細な感情労働であり、その大変さ以上に「利用者に頼りにされ、必要とされることで、気持ちは充実し、利用者や入所者の存在に癒されている」実情がある。つまり、介護職のやりがいは、自らの介護観や目標を追求する中で、利用者や家族から感謝される体験・信頼される体験などから強化され、介護場面一つひとつにおける利用者の反応が介護職を支えていることは明らかである。

しかし、前述したように介護人材不足は喫緊の課題であり、介護労働者の職場定着の遅れは、「利用者のケアの継続性を分断することになりケアの質の低下」^{2) 3)} を招き、また、高度な介護サービスを求められる中、在職中の資格取得・能力開発機能の不足も介護者のバーンアウトを招く大きな要因^{4) 5)} となっている。

そこで本研究では、職場定着を促進する要因として、介護職自身が自らのケアを検証できる「生活歴」に特化したアセスメント能力確認ツールの開発を目指し、その成果を基に日々のケアに対する省察の機会や、自己覚知につなげることを目的とした。

II. 研究方法

研究方法を述べる前に本研究に用いるアセスメント能力確認ツールについて説明を行う。アセスメント能力確認ツールは WG メンバーが、先行研究や既存の利用者理解のためのアセスメントツールを参照にしたシートを土台にし、それぞれの介護経験を加味したアセスメント項目を列記した上で、KJ的な手

法を用いて分類した。更に時系列に整理し作成したアセスメント能力確認ツール【静岡版】Ver. I と命名した。アセスメント能力確認ツール【静岡版】Ver. I は以下（ASMS-I）と表記する。ASMS-I 作成のためにミーティングを 2013 年度内に 10 回実施した。

1. 対象

WG メンバーが従事する静岡県内の介護事業所に従事する介護職員 150 名を対象とした。

2. 調査方法 留置法による自記式質問紙調査

3. 調査期間 2013 年 11 月 1 日～2014 年 1 月 31 日

4. 主な調査内容

ASMS-I を使用。属性は施設種別・基礎資格・年代・職位で構成を行った。アセスメント項目は 123 項目で構成され、【よい】【普通】【あまり】の 3 件法で行った。

5. 調査に際しての倫理的留意

WG メンバーが口頭で調査対象者への調査目的の説明を行い協力の同意を得た。質問紙調査の提出をもって同意とみなした。調査データの取扱いに際しては、対象者のプライバシー保護に留意し、WG メンバー相互に管理を行った。

6. 分析方法

協力者の施設種別・基礎資格・年代等の基本属性、アセスメント項目については、単純集計およびクロス集計を行った。

表 1 ASMS-I の質問紙表の概要

	過去	現在	未来
受療状況・身体状況	K-I	G-I	M-I
日常生活動作と生活習慣	K-II	G-II	M-II
人間関係	K-III	G-III	M-III
心理・認知面	K-IV	G-IV	M-IV
ライフストーリー	K-V	G-V	M-V

Ⅲ. 結果

1. 属性

有効回答は 115 名（回収率 76.6%）であった。

表 2 属性 (N=115)

サービス種別	在宅 38・施設 77
介護福祉士資格有無	有 68・無 47
年代	10代 1・20代 19 30代 27・40代 25 50代以上 38
経験年数平均	82.7ヶ月
*経験年数グループ	5年以上 67 5年以下 48
サービス種別	在宅 38・施設 77
介護福祉士資格有無	有 68・無 47

2. クロス集計

表1で示した質問項目群と時系列群と属性とのクロス集計を行った。

施設種別【在宅】【施設】との違い、資格の有無【介護福祉士資格の有】【介護福祉士資格の無】、経験年数グループ【5年以上】【5年以下】のグループの平均を見た。グループ内に見られる特徴をWGメンバー全員で検討を行った所、以下の5点が挙げられた。

- i. 【在宅】【施設】を比較すると【施設】に従事する介護職員のポイント数が全ての項目において高い
- ii. 介護福祉士資格の有【介護福祉士資格の無】を比較すると【介護福祉士資格の有】介護職員のポイント数が全ての項目において高い
- iii. 【5年以上】【5年以下】を比較すると【5年以上】に従事する介護職員のポイント数が全ての項目において高い
- iv. 質問項目群間では《日常生活動作と生活習慣》質問項目群が一番高く、《ライフストーリー》が一番低いのは、どのグループでも共通している
- v. 時系列群では[現在][過去][未来]の順でポイント高くなっており、どのグループでも共通している

IV. 考察

【在宅】【施設】を比較すると【施設】に従事する介護職員のポイントが高い結果から、チームケアの方がより利用者を多角的に観察していることが明らかになった。一方、《日常生活動作と生活習慣》を重視している面もあり、“その人らしさ”を象徴する《ライフストーリー》が低い。これらのことから、真の意味での生活歴を見ていない面が否めない。【在宅】は全般的にポイント数が低い可他質問項目群に比して《ライフストーリー》が特段低い訳ではないことから、短時間のスポット的なケアではあるが、利用者の生活を尊重したケアを心がけているとも言える。資格の有無や、経験年数の違いは今後の研修課題として提示できる点が見られた。今後はASMS-Iを汎用性のあるものにしていくために χ^2 乗検定、t検定での検証を行える程度の母数を集めることや、代表的なケースの提示及びTEGなどを参考にした。自己理解できるサンプル抽出が課題である。

V. 結論

介護職は総じて、生活歴から“その人らしさ”や個別性を意識できていないことから、アセスメント能力における自己の傾向性の理解が不可欠である。

VI. 謝辞

本研究にあたり御協力くださった介護職員の方々に感謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 武井麻子「感情と看護一人とのかかわりを職業とすること」(2001) 医学書院, pp32
- 2) 冷水豊・前田大作・坂田喜子・東條光雄・浅野仁(1986)「特別養護老人ホーム寮母の退職意向」『社会老年学』23, pp26-41
- 3) 李政元(2001)「ナースの離職行動～メタパス解析による職満足感一転職行動モデルの検証～」『関西学院大学社会学部紀要』pp89-93
- 4) 黒田研二・張允楨(2011)「特別養護老人ホームにおける介護職員の離職意向および離職率に関する研究」『社会問題研究』60, pp15-25
- 5) 鈴木聖子(2010)「介護ケアの質の評価に関する研究—介護ケアの質を構成する評価指標の開発」

高齢者における身体機能と運動時の疲労に対する適応能力に関する研究

西田裕介*¹⁾、石井秀明²⁾、平井章²⁾、山本隆弘²⁾、上野貢一²⁾

¹⁾聖隷クリストファー大学、²⁾社会福祉法人十字の園

I. 背景

社会福祉法人十字の園は、地域や施設入所されている高齢者を対象に生活を支援するサービスを提供している。高齢者が自立した生活を維持するためには、身体機能を維持することが重要である。近年、身体機能の低下の原因として、下肢筋肉量の減少(サルコペニア)よりも下肢筋力の低下(ダイナペニア)に注目が集まっている。この高齢者の筋力低下のメカニズムは、神経(中枢)活動の障害であると示唆されている。また、高齢者の骨格筋の神経活動にアプローチする方法は主に運動である。運動の効果を得るためには運動時の疲労に対して適応していくことが必要である。疲労は力の減少と定義され、日常生活を活動的に生活するためには、運動時に力が減少せずに多くの力が発揮できることが重要である。したがって、高齢者を対象に運動を行うリハビリテーションの専門職は、運動により神経活動にアプローチし、疲労しづらくしていく必要がある。しかし、身体機能の低下の有無により高齢者の運動時の疲労に対する適応能力(疲労課題中に多くの力を発揮できる能力)の違いが明らかにされておらず、実際に身体機能が高い高齢者は疲労に適応できる能力が高いのか不明である。そこで、身体機能と運動時の疲労の適応能力の関係を明らかにする必要がある。

II. 目的

本研究の目的は、身体機能の低下の有無により、疲労に対する適応能力(疲労課題中に多くの力を発揮できる能力)の違いを明らかにすることである。目的を明らかにするために、課題 I で身体機能に影響する要因を再検討し、課題 II では身体機能別の疲労課題に対する適応能力を調査する。

III. 方法

課題 I : 身体機能に影響する要因の同定

1) 対象

対象は、地域在住高齢者およびケアハウス居住者で移動が歩行および歩行補助具使用にて自立している 74 名(平均年齢: 84.6±7.5 歳、男性: 12 名、女性: 62 名)とした。

2) 測定指標・測定機器

測定指標は、身体機能、体組成、筋力、認知機能とした。

身体機能の測定は Short Physical Performance Battery(以下; SPPB)を使用して測定した。本研究では 10 点以上を身体機能維持群(以下; 維持群)、9 点以下を身体機能低下群(以下; 低下群)と定義した。

体組成は生体電気インピーダンス法(ioi353s、OWA MEDICAL 社製)にて四肢筋肉量、体脂肪率、BMI を測定した。筋肉量は身長による影響を補正するために、四肢筋肉量の値を身長(m)の 2 乗値で除して Skeletal Mass Index(以下; SMI)を算出した。

筋力は下肢筋力と握力を測定した。下肢筋力は、ハンド・ヘルド・ダイナモメーター(Mobie MT-100、酒井医療社製)を使用し、膝に痛みのない下肢で膝関節伸展の最大等尺性収縮(Maximum Voluntary Contraction; 以下 MVC)を測定した。測定肢位は椅子座位とし、測定

誤差を最小限にするために、ブルセンサー(MT110、酒井医療社製)を使用して測定した。測定は数回練習を行った後に、3回測定して最大値を代表値とした。また、分析には実測値(N)を体重で除した値(N/kg)を用いた。握力はデジタル握力計(T. K. K5401、OG 技研社製)を用いて、椅子座位で背もたれにもたれず、上肢は体側につけないように指示して測定した。測定は左右2回ずつ測定し、最大値を代表値とした。

認知機能は Mini-Mental State Examination(以下 ; MMSE)を使用して測定した。

3) 統計学的検討

各指標は維持群と低下群に分類し、平均値±標準偏差で示した。両群間の基本属性および特性の比較には対応のない t 検定、男女の人数の差には χ^2 検定を用いた。また、身体機能に影響を及ぼす要因を検討するために、重回帰分析を用いた。従属変数は SPPB とし、独立変数は年齢、BMI、体脂肪率、SMI、下肢筋力、握力、MMSE とした。独立変数の選択はステップワイズ法を用いた。なお、全て有意水準は危険率 5%未満とし、統計ソフトは SPSS 19.0 Japanese を用いた。

課題 II : 身体機能別の疲労課題に対する適応能力

1) 対象

対象は、女性の高齢者 15 名とし、課題 I の SPPB の結果をもとに、身体機能維持者 8 名(SPPB スコア ; 10 点以上)と身体機能低下者 7 名(SPPB スコア ; 9 点以下)に群分けした。除外基準は、歩行が自立していない、著明な不整脈がある、重度な高血圧がある、心疾患や呼吸器疾患を有している、研究の目的や方法などの説明が理解できない(重度の認知症やコミュニケーション不良)、変形性膝関節症の既往を有して膝蓋大腿関節に痛みがある者とした。また、設定課題中に、最大速度で $230^\circ /s$ 以上を発揮できなかった者も除外した。

2) プロトコル

被験者は多用途筋機能評価装置(バイオデックスシステム 3、バイオデックス社製)を使用し、股関節屈曲 85° 、膝関節屈曲 90° の状態で 5 秒間の膝関節伸展の MVC を 3 回測定した。5 分以上休憩した後に、被験者は 20%MVC の負荷に対して出来るだけ速い速度で膝関節伸展運動(膝関節屈曲 90° から 0° まで)を 30 回行う疲労課題を実施した。被験者には出来るだけ早く膝関節を伸ばすように指示した。また、被験者には膝関節完全伸展後に力を抜いてもらい、検者が開始肢位の膝関節屈曲 90° に戻した。なお、疲労課題の実施中は 1 回でも $230^\circ /s$ を上回っていることを確認した。

3) 測定指標

測定指標は、MVC、最大パワー、最大速度、疲労課題中のパワーの推移および総和、疲労課題中の筋電図信号とした。

MVC は疲労課題前に測定し、3 回のうち最大値を代表値とした。最大パワーは疲労課題中に発揮した最大速度と 20%MVC の値を掛け合わせた値とした。疲労課題中のパワーの推移は、最大パワーを 100%として、5 回ごとの平均値をもとにパーセントで算出し、力の変化を表す指標とした。また、疲労課題中のパワーの総和は、20%MVC の値と 1 回ごとの速度をもとに 1 回ごとのパワーを計算し、合計を算出した。

疲労課題中の筋電図信号の測定は、筋電図システム Tele Myo G2(Noraxon 社製)を用いた。筋電図信号は、疲労課題中に大腿直筋と外側広筋から記録した。電極から導出されたアナログ信号は A/D 変換器を介し、サンプリング周波数 1500Hz でパーソナルコンピュータに取り込み、筋電図解析ソフトウェア Myo Research XP で解析した。筋電図信号の振幅を

調べるために、50msec ごとの Root Mean Square により平滑化し、疲労課題中の膝関節屈曲 90° から完全伸展までを解析対象とした。疲労課題中の筋電図信号は大腿直筋と外側広筋の 5 回ごとの平均値をもとに、1-5 回を 100%とし、5 回ごとの変化率を算出した。

4) 統計学的検討

測定結果は、平均値±標準偏差で示した。MVC、最大パワー、最大速度、疲労課題中のパワーの総和における群間の比較には、対応のない t 検定を用いた。また、疲労課題中のパワーと筋電図信号の時系列と群間の 2 要因の比較には繰り返しのある二元配置分散分析を行った。有意差を認めた場合、時系列は Tukey' s HSD による多重比較検定を用いた。また、群間の比較は対応のない t 検定を用いた。疲労課題中のパワーの総和と筋電図信号の関係を検討するために、Pearson の積率相関分析を用いた。全て有意水準は危険率 5%未満とし、統計ソフトは SPSS 19.0 Japanese を用いた。

IV. 結果

課題 I : 身体機能に影響する要因の同定

74 名の高齢者を維持群(35 名)と低下群(39 名)の 2 群に群分けした。その結果、維持群は低下群に比べて、年齢が有意に低く(維持群 vs. 低下群; 82.4±7.0 歳 vs. 86.5±7.4 歳)、下肢筋力(維持群 vs. 低下群; 5.01±1.48N/kg vs. 3.46±0.97N/kg)、握力(維持群 vs. 低下群; 21.8±6.2kg vs. 17.2±5.4kg)、MMSE(維持群 vs. 低下群; 26.9±2.7 点 vs. 23.3±4.7 点)が有意に高い値を示した(p<0.05)。しかし、BMI、体脂肪率、SMI には有意差が認められなかった。

重回帰分析における逆行列の支障となり、回帰式の精度も悪くなる多重共線性の考慮として相関行列表を観察したが、 $r>0.9$ もしくは $r<-0.9$ となるような変数は存在しなかったため、全ての変数を対象とした。抽出された指標は下肢筋力、MMSE であった。標準偏回帰係数は下肢筋力が 0.50、MMSE が 0.23 であり、 R^2 は 0.37、Durbin-Watson 比は 1.87 であった。

課題 II : 疲労課題に対する身体機能に影響する要因の反応

疲労課題中のパワーの総和(維持群 vs. 低下群; 2068.8±635.3W vs. 1385.4±547.5W)は群間に有意差を認め(p<0.05)、年齢、MVC、最大パワー、最大速度は有意差を認めなかった。

疲労課題中のパワーの時系列は、維持群では 11-15 回以降、低下群では 21-25 回以降において 1-5 回と比べて有意に低下した(p<0.05)。また、疲労課題中のパワーの群間は 1-5 回において差が認められた(p<0.05)。疲労課題中の筋電図信号は維持群では徐々に上昇していくのに対し、低下群は徐々に減少していき、16-20 回以降で群間に有意差を認めた(p<0.05)。1-5 回に対する 25-30 回の筋電図信号の変化率と疲労課題中のパワーの総和の相関分析の結果は、 $r=0.585$ (p<0.05)であった。

V. 考察

課題 I では、独歩および歩行補助具使用にて移動が自立している高齢者の身体機能に影響する要因を検討した。その結果、筋力が最も身体機能に影響する要因であることが証明され、筋系のみだけでなく、神経系も検討する必要性が示唆された。

重回帰分析により、身体機能に影響する要因として下肢筋力と年齢が要因として抽出された。加齢により、バランス、持久力、歩行速度といった運動機能の低下が生じる。よって、年齢が抽出されたと考えられる。下肢筋力は筋力を反映する指標である。筋力は神経

系と筋系の2つの要因によって発揮され、神経系の要因が身体機能の維持において重要であるとされている。神経系は加齢により、運動ニューロンの減少、最大の運動単位の発火頻度の減少、主動作筋と拮抗筋の異常な筋活動が生じる。また、身体機能と神経活動には正の相関関係が認められると報告されている。課題Ⅰの群間比較の結果においても、下肢筋力に有意差を認めている。この有意差はSMIに差がないことから、神経活動による影響であると考えられる。よって、重回帰分析の結果は、高齢者の身体機能には筋力、特に神経活動が影響することを示唆する。

そこで、課題Ⅱでは神経活動を測定し、疲労課題に対する適応能力を検討した。その結果、疲労課題中のパワーの総和と筋電図信号は維持群に比べ、低下群で有意に低く、疲労課題中のパワーの総和と筋電図信号の変化率には、正の相関関係を認めた。よって、身体機能が高い高齢者は疲労に適応できる能力が高いことが示され、身体機能の低下の原因は神経活動であることが明らかになった。

課題Ⅱの疲労課題中、両群ともに有意にパワーが低下しており、疲労が生じた。疲労課題中のパワーの総和は維持群に比べ、低下群で有意に低い値を示した。この結果は先行研究と一致する結果であり、課題ⅡにおいてMVCや最大パワーに差がないことを考慮すると、身体機能の低下には、疲れずに持続的に力を発揮する能力が関与すると考えられる。力は神経系と筋系の両方の要因により発揮され、1回のパワーを発揮する時の神経活動は加齢の影響を受けず、身体機能が低下すると減少する。また、健常者を対象とした疲労課題に対する筋電図信号は、追加的に運動単位の動員や発火頻度を増やすために、増加することが確認されている。つまり、身体機能が低下すると運動単位を追加的に動員することや発火頻度を増やすことが困難になると考えられる。課題Ⅱにおいて低下群は維持群に比べて神経活動が低下しており、さらに疲労課題による神経活動の変化率とパワーの総和に正の相関関係が認められたことから、追加的な運動単位の動員や発火頻度を増加できる能力が身体機能を維持する上で、重要な要因であることが明らかとなった。

以上の課題ⅠとⅡの結果より、身体機能には疲労に適応できる能力(疲れずに持続的に力を発揮する能力)が関与し、身体機能の低下を引き起こす原因に神経活動を賦活できる能力が影響することが示唆された。今後、社会福祉法人十字の園で高齢者を対象に運動を提供していく際には、神経活動に着目していく必要がある。さらに、疲労という視点を持ちながら運動の効果を評価し、身体機能の変化をみていくことで、高齢者の生活の質の向上に寄与できると考えられる。

VI. 学会発表の状況

- ・ 第29回東海北陸理学療法学会大会、2013年11月、最優秀賞受賞(共同)。
- ・ 第49回日本理学療法学会大会、2014年5月

地域在住高齢者を支えるリハビリサポート体制の構築

金原一宏^{*1, 2)}、大城昌平^{1, 2)}、根地嶋誠^{1, 2)}、合田明生³⁾、寺田和弘⁴⁾

¹⁾ 聖隷クリストファー大学、²⁾ 聖隷クリストファー大学大学院、

³⁾ 十全記念病院、⁴⁾ 寺田痛みのクリニック

I. 事業の概要

厚生労働省が3年に1度発表する国民生活基礎調査の痛みの有訴率は、近年その疾患に変化はなく、男女ともに腰痛、肩こりが1、2位を占め、その人数は年々増加している。これは、我が国の慢性疼痛治療が、奏効していないためである。近年、問題として取り上げられる慢性疼痛は、本来の痛みの意味である体への危険信号ではなく、痛みを受けすぎることで中枢神経に可塑的な変化を呈した病態である。身体障害がなくとも、脳内の変化により、痛みを感じているのである。国際疼痛学会における痛みの定義は、「痛みは、不快な感覚性・情動性の体験であり、それには組織損傷を伴うものと、そのような損傷があるように表現されるものがある」としている。この定義で痛みとは、感覚であり情動であるとしたこと、さらに身体に傷害部位が無くとも患者の訴えている痛みは、痛みと認識している。つまり、炎症の痛みだけでなく、情動（心）による痛みも含め、痛みと定義している。臨床では、このような慢性疼痛を罹患した患者は、治療を受けてもその効果は上がらず、病院を変えるドクターショッピングに至る。地域にはこのような患者は多く、さらに高齢者は、加齢による身体機能の低下から痛みを生じる。

地域高齢者が快適に暮らすには、疼痛の知識を学び、自宅や介護保険サービスの利用時に周囲の方と共に、運動に取り組むことで、慢性疼痛を減少させる必要がある。現在の状況を知る限り、早急な対応が必要である。我々は、地域住民が健やかに生活するために痛みを含めた健康講座を開催した。この講座は、地域住民や地域在住高齢者の健康寿命の延長を支えていく上で重要である。健康には、身体的健康と心理的健康があり、各分野に精通した医療従事者である本学教員が講師を務めることで地域在住高齢者との交流を図ることができ、本大学及び大学院が地域に根付いていくことに繋がる。講座を通じて、最新の脳や身体機能（身体的・心理的健康）、そして痛みの話題、さらに研究への参加が促され、地域住民は脳と身体機能を自ら知ることによって、痛みや健康への意識が増すと考えられる。

この講座の役割は、日頃の研究を地域住民へ還元するとともに、地域住民が気軽に参加できる講座を地域内で開催することで日常生活における生活の質の向上と健康寿命の延長を支えると考えている。

II. 目的

地域在住高齢者の健康生活を支えるシステムを構築するため、本講座の状況を踏まえ現状のリハビリサポート体制を把握する。

III. 実施方法

方法は、

- ① 研究分担者と相談し、リハビリサポートを開催する日程を決定した。
- ② 講座内容は、健康を脳と身体機能に着目し、痛みの医学と生涯人間発達の視点から捉え、講演に実演を含め行うよう決定した。
- ③ リハビリサポートの広告を作成した（図 1）。
- ④ 浜松市北区と中区の一部にリハビリサポートの広告を配り（13,000 世帯へ新聞折り込みを 1 回配付した）、参加者を募った。
- ⑤ 聖隷クリストファー大学の教室を使用してリハビリサポート（実習・講演等を中心に実施した）を開催した（図 2）。
- ⑥ より良いサポートのために講義内容の柱を、腰痛として、講座を実施した。
- ⑦ アンケートにより、受講生のトレーニングに関する意欲や講座内容の反応、さらに地域への貢献度を調査した。
- ⑧ アンケートを利用して地域の方々が必要としている情報内容を把握することに務め、この活動をより充実したものにするため情報収集をした。

IV. 倫理的配慮

研究代表者および個人情報取扱者は、対象者ごとに整理番号を付与して、匿名化データを作成し、厳重に保管・管理する。この活動から得られた結果の公表については、個人の名前など一切わからないようにし、プライバシーが完全に守られるように配慮した。

V. 成果（地域との連携の成果）

今回の成果であるアンケート結果を以下に示す。

参加者数：2月1日：62名 アンケート回収率：100%

以下アンケート内容（図 3）

問 1 あなたの性別と年齢を教えてください

男 26 名平均年齢 58 歳（14～81） 女 33 名平均年齢 64 歳（19～79）

問 2 「痛みの基礎と最新治療」を受講して理解が深まりましたか？

かなり理解できた 17 名 ・ 理解できた 38 名 ・ どちらともいえない 3 名

問 3 「慢性的な痛みの理学療法」を受講して理解が深まりましたか？

かなり理解できた 20 名 ・ 理解できた 33 名 ・ どちらともいえない 4 名

問 4 「腰痛のためのトレーニング」を受講して理解が深まりましたか？

かなり理解できた 22 名 ・ 理解できた 29 名 ・ どちらともいえない 1 名

（問 2・3・4 では、あまり理解できなかった・全く理解できなかったは 0 名であった）。

問 5 このような健康講座は 1 年にどれくらい実施すべきか？ 教えてください。

毎月 1 名 ・ 2 か月に 1 回 4 名 ・ 3 か月に 1 回 12 名

6 か月に 1 回 31 名 ・ 1 年に 1 回 6 名

問 6 あなたは、今、痛む部位がありますか？

回答：ある 42 名 ・ ない 16 名

「ある」と答えた方にお聞きします。（「ない」と答えた方は問 7 へ）

① の痛みはいつからですか？ 回答：10 日前から 1 年以上の期間

② どこに痛みがありますか？ 回答：腰 膝、股関節、肩 足関節

③ 講義を受け、痛みが減りましたか？

回答：痛みが減った 12 名・痛みが減らない 18 名

④ 「痛みが減った」と回答した方にお聞きします。

本日の講座受講前後の痛みの強さと痛みの不安 下記の数字につけてください。

受講前平均値：痛みの強さ 6/10 不安 3/10

受講後平均値：痛みの強さ 5/10 不安 2/10

すこやかにリハサポート
あなたの健康をリハビリ専門職の理学療法士がサポートします！

すこやかに生活を送るためには、生活の中で適切なトレーニングが大切です。良かれ、地域にお住まいの方の健康生活を支えていく取り組みをしたいと考え、健康維持を促進することに致しました。この機会に、健康生活を維持するための知識と方法を学び、すこやかに過ごしていただきたいと思います。

日時	題名	内容	講師
2014年2月1日(土) 痛みの医学から 腰痛をリハサポート			
14時から15時	痛みの基礎と最新治療	痛みを専門に治療している医師が、痛みの基礎知識とその治療についてお話しします。	医学博士 寺田 和弘 (寺田痛みのクリニック院長)
15時から16時	慢性的な痛みのリハビリ	慢性疼痛症の理学療法をご紹介し、慢性疼痛症における日常生活の工夫についても、お話しします。	金原 一宏 (聖隷クリストファー大学教授)
16時から17時	腰痛のためのトレーニング	腰痛症における筋力や筋持久力を強化するための基礎知識を実技も入れて提供します。	根地崎 誠 (聖隷クリストファー大学教授)

*会場は、聖隷クリストファー大学（浜松市北区三方原町 3453）3号館1階

申込・問い合わせ先
 FAXでお申し込みください。
 FAXでのお申し込みの場合は、要領をご利用ください。
 〒422-8558 静岡県浜松市北区三方原町 3453
 聖隷クリストファー大学
 リハビリテーション学部 金原一宏宛
 FAX:053-439-1406
 *当日は動きやすい服装でご参加ください。
 ※お申し込みは要領に必要事項をご記入のうえ、そのままFAXしてください。

【定員】50名程度
 【申込期間】1月24日

図1 リハビリサポートの広告



図2 すこやかにリハサポートの講座の様子

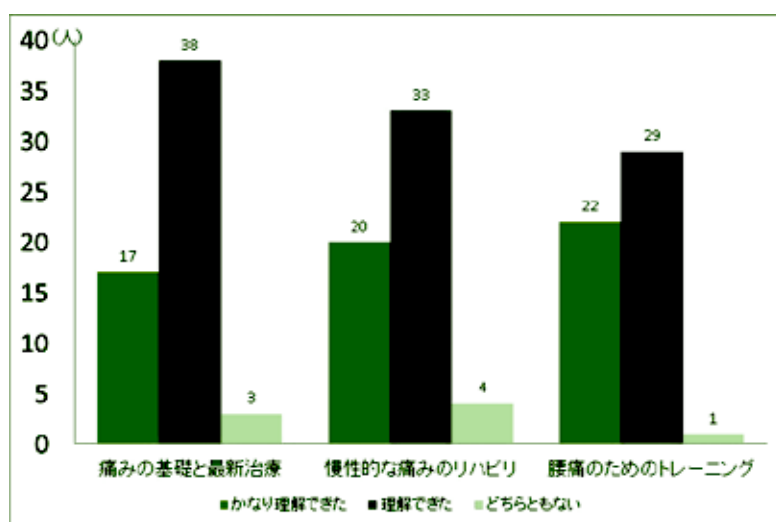


図3 講座内容アンケート結果

問7 今回の講義を受け、ご意見をお聞かせください。(自由記入欄)

- ・運動時間を長くするとよかったですと思います。ペイン Drによる薬の説明がとても参考になりました。又、痛みがあると運動量の低下につながりますが、神経ブロックの活用が勉強となりました。
- ・有意義な講義、興味をもって聴講させていただきました。有難うございました。明日から運動に努め健康維持を図りたいと思いました。
- ・初めて講義を聞きました。とても有意義でした。
- ・貴重な講演ありがとうございました。専門的な内容もあり、勉強になりました。また、次回の講演を期待しています。
- ・今回受講して良かったです。次もあれば受けたい。
- ・ありがとうございました。日常のリハビリの指針となり、心が明るくなりました。前向きに明るく笑顔をもって、生活していきます。
- ・今回初めての参加でしたが、参加できて良かったです。これからは常に笑顔でいたいと思います。またタオルを使ってストレッチも実施していきたいです。
- ・説明がわかりやすくタメになりました。
- ・痛みについてわかりやすく説明してくださり、理解できた。先日、ぎっくり腰をやり、湿布の件で悩みましたが、はっきりしてよかったです。体操継続していきたいです。

ありがとうございました。

- ・具体的な指導を増やして欲しい。腰痛予防は歩くこと。体を動かすことが大切だと知りました。痛み予防は笑いでしょうか。
- ・理解できた。今後の参考に大いになりました。
- ・日常生活で心して動く事を心掛けて楽しく生活をして行く様にすごしたいと思います。ありがとうございました。
- ・痛みが起きるメカニズム、部位を具体的に知ることが出来ました。（分かり易くご説明頂きましたことで）
- ・トレーニングの説明と実技は大変、有効でした。
- ・今回新聞広告にパンフレットが入ってきて、この講座を知りましたが、いろんな形でお知らせしていただくと助かります。とても良い講座でした。今後役に立てたいと思います。年に何回かやっていただくとありがたいです。ありがとうございました。
- ・時間が長いので、もう少し少なくして2～3回に分けて欲しい。無料でなくても資料代位を負担してもよいので、質問時間なども作ったり、体操なども2～3回あるとありがたいです。運動で気持ちよくなりました。ありがとうございました。
- ・次回も必ず参加します。よろしくをお願いします。
- ・今整形に通院していますが、今回の講座の方がよく理解できました。腰痛のためのトレーニングを家でもやってみようと思っています。トレーニングはとてもよかったです。
- ・トレーニングの仕方、大変参考になりました。おしりが痛いのが少し楽になりました。自己流の運動でなく、正しく毎日することが大事だと思いました。毎日トレーニングします。ありがとうございました。

VI. 考察とまとめ

アンケートから講座受講後の受講生の理解度は、おおよそ80%以上であった。受講後の痛みの改善は、痛みのある方の約70%で痛み強度と不安が減少した。今回、講義を通して受講生の痛みの知識が向上し、痛みを理解したことで痛みの不安感が減り、痛みを抑制した可能性を示唆した。受講生は、痛みの知識を学ぶことで痛みの機構を知り、日常生活における身体や脳の不安体験を減少できた可能性がある。さらに各講座の満足度も高い結果である。自由記載は、講座開催に関する感謝の意や、痛みの正しい知識を学修され、痛みの抑制の仕方を知り実際に痛みが抑制された感想をいただいた。以上より、今回の講座が地域在住の方々に役立てられ、本学で実施したこの講座が地域貢献に至っていると推察できた。痛みの知識は、日頃学ぶ機会がなく、今後も活動を継続する必要性を感じた。

今回の健康講座では、腰痛に焦点をあてた。今回テーマとして提示した腰痛は、慢性疼痛への移行が大きい現状があり、その機構は住民に周知されていない。今後も、痛み講座の必要性を感じた。すこやかな生活を送るためには、痛み改善は重要である。このような健康に関する様々な企画を、地域の方々に受講していただくことで、健康寿命が延長する可能性がある。痛みを持つ方々はまだまだ多く、より健康な生活を送るため、我々は、健康講座を開催していく意義があると考えている。ゆえに今後も、すこやかにハサポート健康講座を継続することで、この地域住民の方々のリハビリサポート体制を整えて行く。

VII. 未発表の場合等は発表計画等

保健福祉実践開発研究センターが企画する報告会で発表する。

発達障害をもつ児童への支援の確立、および少～青年期の支援研究

伊藤信寿^{*,1)}、真鍋智美²⁾、白瀧いずみ²⁾、長谷美智代³⁾

¹⁾聖隷クリストファー大学、²⁾根洗学園、³⁾浜松市保健所

I. 目的

発達障害を抱える幼児、児童、青年を継続的に支える支援方法およびそのシステムを試行し、その有効性を実証することで、広く地域にその方法とシステムを定着させることにある。そこで今回は特に夏休み等の子どもの長期休暇時における支援と、地域で実行しやすい集団活動の組み合わせに保護者支援のプログラムを加えることで、その有効性を実証しようとするものである。

II. 方法

1) 対象

A 発達支援センターを卒園した小学生 7 名

2) 募集方法

A 発達支援センターを卒園し、在園中に作業療法士による感覚統合療法（以下 SI）に基づいた集団作業療法に参加した子どもの家庭に、センターより余暇支援活動参加の案内と希望申請を送付。7 名から参加希望があり、発達障害をもった小学生 7 名と、そのきょうだい 3 名に対し、余暇支援活動を実施した。そのうち同意が得られ 7 名について分析した。

3) 倫理的配慮

対象者の保護者に対し研究内容と、研究協力の同意が得られない場合も余暇支援活動を受けられることを説明し、全員から署名にて同意を得た。

4) 余暇支援活動の内容

期間：夏休み 2013 年 8 月 28 日、29 日、30 日の 3 日間

春休み 2014 年 3 月 25 日、26 日、27 日の 3 日間

時間は 10 時から 17 時までであるが、参加時間は各家庭で自由とした。

場所：中区にある倉庫を借り、SI で使用する遊具を設定した。



図1 お借りした倉庫



図2 遊具等を設置



図3 ウォータースライダー

活動内容：表1

活動には子どものみが参加した。子どもの送迎は保護者をお願いした。

表1 余暇支援活動の内容（夏休み版）

	8/28	8/29	8/30
午前	SIを基盤とした遊び 昼食の食材の買い物 昼食作り	SIを基盤とした遊び 昼食の食材の買い物 昼食作り	SIを基盤とした遊び 昼食の食材の買い物 昼食作り
昼	昼食（カレー）	昼食（お好み焼き）	昼食（うどん）
午後	おやつづくり（かき氷） ウオータースライダー 水遊び（ビニールプール） 自由	おやつづくり（白玉） ウオータースライダー 水遊び（ビニールプール） 自由	おやつづくり（ホットケーキ） ウオータースライダー 水遊び（ビニールプール） 自由

表2 余暇支援活動の内容（春休み版）

	3/25	3/26	3/27
午前	SIを基盤とした遊び 昼食の食材の買い物 昼食作り	SIを基盤とした遊び 昼食の食材の買い物 昼食作り	SIを基盤とした遊び 昼食の食材の買い物 昼食作り
昼	昼食（たこ焼き）	昼食（ハンバーグ）	昼食（カレー）
午後	おやつづくり（わらびもち） SIを基盤とした遊び 創作 自由	おやつづくり（クレープ） SIを基盤とした遊び 創作 自由	おやつづくり（ホットケーキ） SIを基盤とした遊び 創作 自由

5) SIとは

自分自身の身体の情報や周囲の情報（感覚刺激）を上手く整理して取り入れることが苦手で、混乱している方に対して、遊具や様々な感触を得られる玩具等を使用して、感覚情報を上手く整理して適応行動を引き起こすことを目的とした療法である。例えば、光や音に非常に過敏なため、過剰に反応し落ち着きをなくしてしまう子どもや、触覚が非常に過敏なため、物に触れない、人との接触を避けるような過剰な防衛反応を示す子ども、逆に触覚が鈍麻なために、ボタンや紐の感触がわかりにくく、上手くボタンをはめられない、靴ひもを結べないといった不器用な子ども。あるいは、高さやスピードに対して非常に鈍麻なため、高所のような危険な場所に行きたがったり、過剰に動き回る子どもなど、感覚刺激に対して過剰に過敏あるいは鈍麻なために、問題行動を引き起こしている子どもが少なくない。このような子どもに対して、遊具等を使用して遊びの中で楽しめる感覚を提供することにより、子どもの感覚情報処理機能の成熟を促し、苦手な部分を育てていくことを目的としたものがSIである。

6) 効果判定

子どもの特徴の評価：JSI-R

JSI-R：子どもに感覚刺激に受け取り方に偏りがある場合、その傾向が様々な行動に表れてくることがあります。JSI-Rは、このような行動の出現頻度を調査することで、子どもたちの感覚刺激の受け取り方の傾向を把握しようとするチェックリストです。前庭感覚 30 項目、触覚 44 項目、固有覚 11 項目、聴覚 15 項目、視覚 20 項目、嗅覚 5 項目、味覚 6 項目、その他 16 項目の 8 つの下位検査と 147 の質問項目から構成されている。結果は、「典型的な状態」、「若干の偏りの傾向が推測される状態」、「偏りの傾向が推測される状態」の 3 段階評価で解釈できるように作成されている。

活動の効果の評価：保護者へのアンケート調査

7) スタッフ

著者 1 名と研究協力者 3 名（1 名が 1 日参加）、学生ボランティア 6 名

Ⅲ. 結果

1) JSI-R

表 2 に示すように、参加者全員に感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推測される状態であった。

	Green	Yellow	Red
前庭覚	2 名	4 名	1 名
触覚	3 名	2 名	2 名
固有覚	4 名	2 名	1 名
聴覚	0 名	4 名	3 名
視覚	1 名	2 名	4 名
嗅覚	3 名	4 名	0 名
味覚	4 名	3 名	0 名
その他	1 名	1 名	5 名
総合点	1 名	3 名	3 名

Green：典型的な状態、Yellow：若干の偏り推測される、Red：偏りが推測される

表 2

アンケート結果

①参加してお子さんの様子はどうでしたか？

大変よかった	よかった	普通	あまりよくなかった	よくなかった
4 名	3 名	0 名	0 名	0 名

②参加してご家族にとってはどうでしたか？

大変よかった	よかった	普通	あまりよくなかった	よくなかった
4 名	3 名	0 名	0 名	0 名

③参加する前に、期待していたことは

- ・遊具で遊べること

- ・本人が楽しんで参加できれば
- ・初めての場所、人にどのくらい適応できるか心配で、今後の参考に様子をみたい
- ・楽しい時間が過ごせる場であってほしい
- ・親が安心して子どもを預けられる場であってほしい

上記の期待していたことは達成できましたか

達成できた	ほぼ達成できた	まあまあ達成できた	あまり達成できなかった	達成できなかった
4名	1名	0名	0名	0名

④お子さんの余暇支援活動など、どのようなサービスがあればいいと思いますか

- ・今回のように思い切り体を動かして遊べる場
- ・送迎から支援してくれるサービス
- ・きょうだいで同じ場所で見えてくれるサービス
- ・プール活動を支援してくれるサービス
- ・気軽に参加できるといい
- ・子どもの適性を見出し、継続しての活動につながっていくような形があればいい
- ・公共の施設などは行きたくても行けないので、気にせず遊ばせてあげられる所

⑤また、このような活動があれば参加したいですか

参加したい 7名

IV. 考察・結論

現在、浜松市における発達障害児への支援は、専門機関が少なく、幼児期に対する支援が主となっており、児童期～青年期での支援方法は確立されておらず、その研究は緊急な課題である。実際に浜松市在中の発達障害児の母親は、幼少期においては支援が比較的多くあるが、就学期以降は支援がなく、

困っているということも多く訴えている。発達医療総合福祉センターによると、個別リハを受けられない発達障害児が多いことを指摘している。そのため今回の事業により、地域における支援方法やシステム作りを企画・実施することにより、多種多様な保護者のニーズに応える機会となり、より多くの発達障害の子どもたちと、その家族への支援が可能となる。

今回参加した保護者からは、「公共の施設などに行きたいが、周囲が気になり行けない」、「身体を動かして遊べる場がほしい」といような希望が聞かれた。アンケート結果からも今回の活動は、保護者の希望に沿った支援であったと考えられる。

また、今回の参加者全員に感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推測される状態であった。この結果から、SIの対象となることが推測される。しかし、SIは子どもの感覚刺激の受け取り方の状態に合わせて、様々な遊具を使用したり、環境を設定したりすることもある。本来であれば、遊具を使用した遊びは公園等でできるが、保護者からの意見にもあったように、公共の場で遊ばせるのに躊躇している。そのため、今回のような支援により、気軽に周囲を気にせず子どもを遊ばせる場の提供が必要である。

今後も、発達障害の子どもたちが、気軽に遊べる、あるいは集うことができる場の提供を検討していくことが重要であると考えられる。

地域における言語聴覚士の専門性の活かし方を検証 ～ことばの教室の先生を対象とした機能性構音障害のスキルアップ研修を開講～

池田泰子¹⁾、藤原百合¹⁾、小島千枝子¹⁾、中村哲也¹⁾、足立さつき¹⁾、
白井有希乃²⁾、森下恵理子³⁾

¹⁾聖隷クリストファー大学、²⁾浜松市立双葉小学校、³⁾磐田市立豊田南小学校

I. 目的

静岡県言語・聴覚・発達障害教育研究会（静言研）は通級指導教室「ことば」（ことばの教室）の先生方が主催する研究会である。ここ数年静岡県西部地区の研究会から本学保健福祉実践開発研究センターへの「ことばの発達」「構音障害」に関する講演や訪問指導の依頼が増えている。2012年度は言語聴覚学科の教員（ST）3名西部地区の6ヶ所のことばの教室を訪問し、現場において機能性構音障害の指導について助言を行った。訪問指導を行った教員からは指導する際にことばの教室の先生方との共通言語・認識を持ってないことがあり、やりにくさを感じたという感想が挙げられた。ことばの教室の先生は言語聴覚士のようにことば・構音について専門的な機関で学んではおらず、静言研が開催する年数回の研修会に参加することを通して自己研鑽をし、職務にあたっている。ことばの教室の先生方から「言語・構音についてしっかり勉強したいが勉強する場がない」という声が耳にすることが多かったので、今回、言語聴覚士とやりとりする際の共通言語を持っていただくこと、スキルアップをして早期に指導が完了することを目標として、機能性構音障害についての集中講座を開催した。言語聴覚士が個人としてではなく組織としてことばの教室の先生方の支援を行うことが本研究の独自性である。

II. 方法

2013年8月23・24日の2日間、静岡県西部地区ことばの教室幼児部・児童部の先生方を対象に機能性構音障害の集中講座を開催した。スケジュールについては下記の通りである。

2013年度機能性構音障害夏期集中講座 スケジュール

8月22日		8月23日	
900～950	講義「音のしくみ」① ～呼吸・発声・共鳴・構音のプロセス～	900～950	演習「音の作り方」
950～1000	休憩	950～1000	休憩
1000～1030	講義「音のしくみ」②～異常構音～	1000～1050	演習「音の汎化」
1030～1045	休憩	1050～1100	休憩
1045～1200	演習「構音検査の流れ」	1100～1230	事例検討①
1200～1300	お昼休憩	1230～1330	お昼休憩
1300～1330	茶話会	1330～1350	茶話会
1330～1415	演習「音の聴き取り」	1350～1520	事例検討②
1415～1425	休憩	1520～1535	休憩
1425～1515	演習「検査結果から指導へ」	1535～1640	講義「まとめ」「質疑応答」
1515～1530	休憩	1640～1650	休憩
1530～1700	演習「模擬患児を対象とした評価」	1650～1700	修了証授与

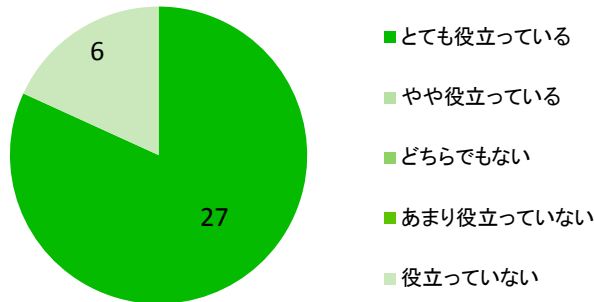
静言研が参加者を募ったところ、幼児部19名、児童部16名、計35名が希望した。静言研には講座参加前と参加1ヶ月後の2時点で講座参加者を対象に構音訓練の困り感について質問紙調査を実施してもらった。その後、講座で学んだことが現場で活かされているかを把握するために1教室の来校指導・1教室の訪問指導を行った。

Ⅲ. 結果

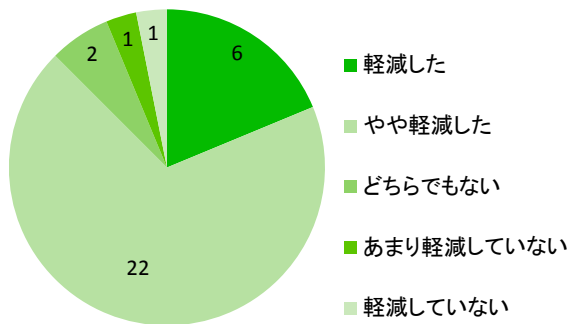
35名中33名分の回答を得た。(回収率：94.3%)

1. 講座1ヶ月後の結果

①「講座の内容は指導場面で役立っていますか」

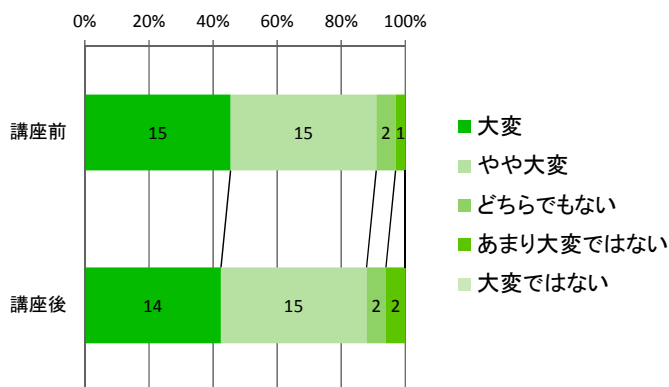


②「講座を受講したことで指導の不安は軽減しましたか」

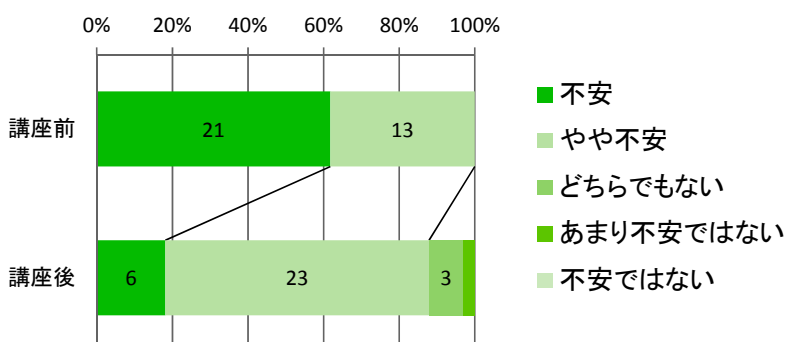


2. 講座前と講座1ヶ月後の比較

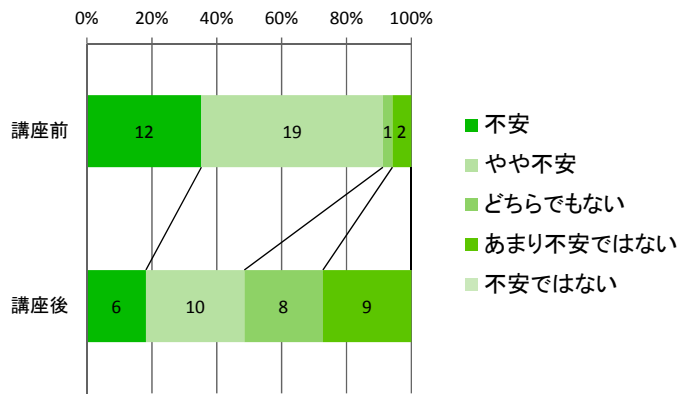
①「ことばの教室の指導は大変だと感じている」



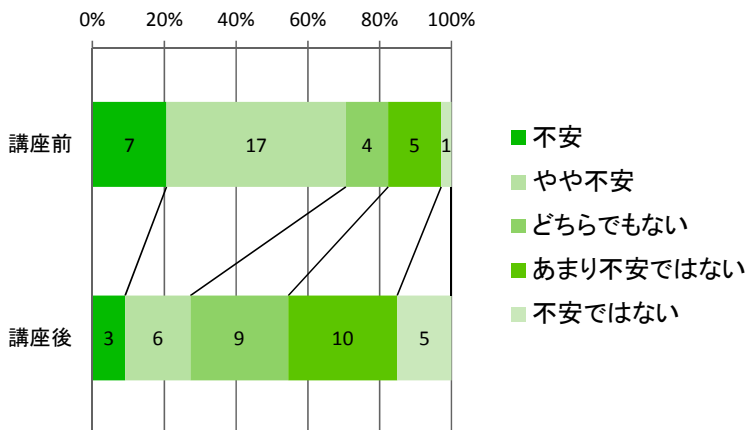
②「自分が行っている指導に不安を感じている」



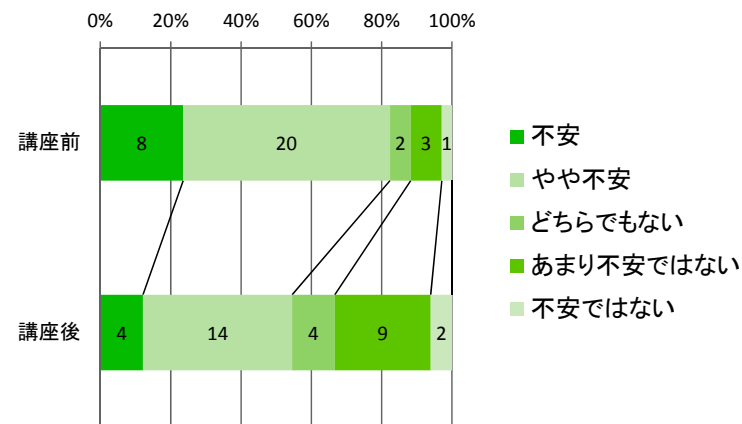
③ 「音のしくみを理解しているか不安に感じている」



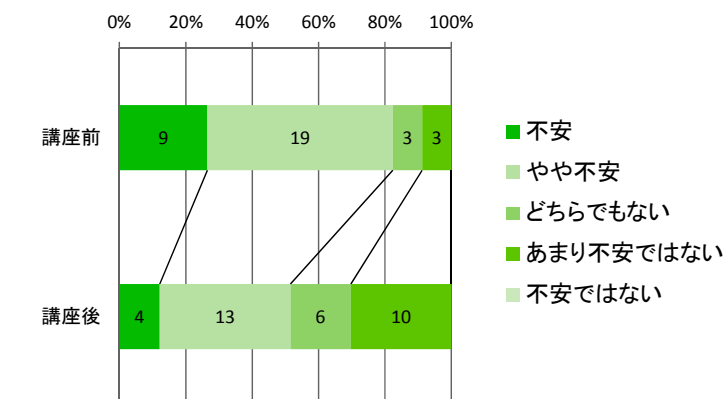
④ 「発音(構音)の検査のやり方に不安を感じている」



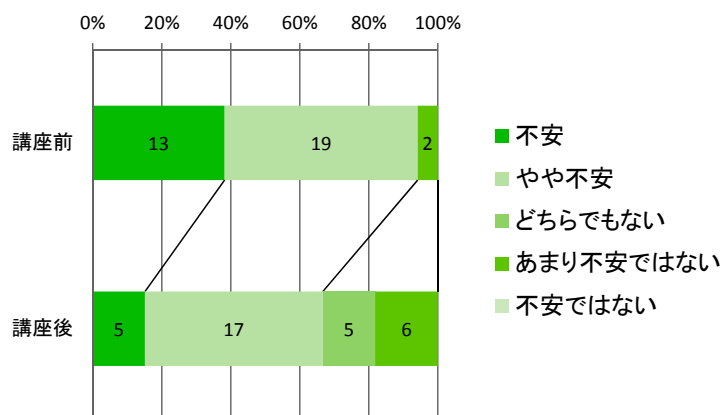
⑤ 「構音の聴き取りに不安を感じている」



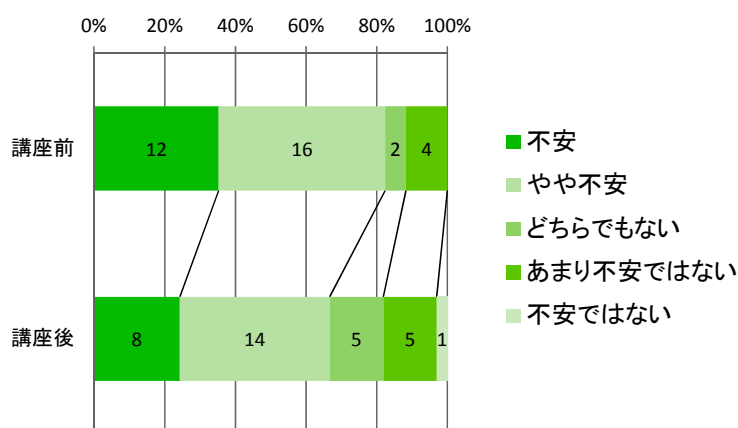
⑥ 「検査結果を指導に活かす方法について不安を感じている」



⑦「音の作り方に不安を感じている」



⑧「音が完成した後、日常会話に汎化させるステップに不安を感じている」



3. 講座1ヶ月後の自由記述から抜粋

<研修について>

「指導法について、何も知らないまま、現場に入り、研修によって知ったのは後からだっ
た…というのが現実。正直、不安だらけの指導でしたので、今回良い機会を得ました。」
「ことばの教室担当になった時、何一つ学んでいない状態です。それでも始まっていき
ます。これでよいのか…と思悩んでいます。採用が決まったら、すぐに研修に出て、
学ぶべきだと思う。」

「2日間、充実した研修会を開いてくださり、本当にありがたかったです。ことばの教
室担当は（児童）担当者がかわり、長く同じ職についている人ばかりではないという
点で、積み上げが難しいです。全国では、3年未満の経験者がたぶんかなりの数を占
めています。そんな中で、静岡県の西部地区の今回の取り組みは、ものすごいことだ
と思います。」

<成果>

「早速、受講した事を、お手本に指導していったら、子どもの発音がすぐに出た。」
「今回、講座に参加させて頂き、基本的なことを学べ、とても勉強になりました。本を
読んでいても、分からなかったこともあったけれど、講座1日目とても分かりやすく、
指導をする上で考えやすくなりました。」
「担当者側の姿勢が少しかわったからか、保護者から子どもの取り組み方が変わったと
言われたから。」
「言語聴覚士の専門の先生方に教えていただいたことで、「指導はこれで良かったかな。」
「この指導ではちょっとマズいな」など、今までやって不安だったことが、「何故このや

り方か」ということから、自分で判断できるようになってきた。」
「構音点や構音の仕組み等について、保護者に分かり易く説明できるようになった。毎日の指導に、自信がもてるようになった。」

4. 訪問指導

2014年3月に指導に困っているとの訪問指導の依頼があり、ことばの教室1校を訪問した。事前打ち合わせでは共通言語を用いて子どもの構音の状態について話すことができた。指導場面では言語聴覚士が提案したことをことばの教室の先生にやっていただいたが、集中講座で話した基礎的な内容では対応できないと判断し、その後、言語聴覚士が子どもの指導を行った。

Ⅲ. まとめ

「講座の内容は指導場面役立っていますか」という質問に対し全員が「とても役立っている」「やや役立っている」と回答、「講座を受講したことで指導の不安は軽減しましたか」という質問に対し、約90%が「軽減した」「やや軽減した」という回答したことから言語聴覚士がことばの教室の先生方を対象に行った機能性構音障害の集中講座は有効であったと考える。質問紙の自由記述にあったようにことばの教室担当になった時には構音についての専門知識がほとんどない状態で指導を行っていて、今回開催した集中講座のような研修が望まれていることは明らかとなったが、今後継続していくには教育委員会、静言研、言語聴覚士が協力して研修システムに組み入れていくことが課題である。

Ⅳ. 発表、論文発表の状況

第16回日本言語聴覚学会で発表予定

2013 年度保健福祉実践開発研究センター運営会議

委員一覧（所属、職位は 2013 年度時点）

センター長	小島 千枝子	リハビリテーション学部言語聴覚学科 教授
副センター長	大場 義貴	社会福祉学部社会福祉学科 准教授
委員	梅本 充子	看護学部 准教授
委員	入江 晶子	看護学部 准教授
委員	店村 眞知子	社会福祉学部こども教育福祉学科 准教授
委員	矢倉 千昭	リハビリテーション学部理学療法学科 准教授

2014 年度保健福祉実践開発研究センター運営会議

委員一覧

センター長	小島 千枝子	リハビリテーション学部言語聴覚学科 教授
副センター長	大場 義貴	社会福祉学部社会福祉学科 准教授
委員	入江 拓	看護学部 准教授
委員	入江 晶子	看護学部 准教授
委員	店村 眞知子	社会福祉学部こども教育福祉学科 准教授
委員	建木 健	リハビリテーション学部作業療法学科 助教

保健福祉実践開発研究センター年報
第5号 (2013)

2014年11月1日発行

編集 聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター

発行 聖隷クリストファー大学

〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町 3453

TEL 053-439-1400 FAX 053-439-1406

ホームページ <http://www.seirei.ac.jp>

印刷 松本印刷株式会社



聖隷クリストファー大学
保健福祉実践開発研究センター
Community-Based Practice and Research Center for Health and Welfare